

スターレター・プロジェクト。それは少年・少女の「願い」を乗せただけの陳腐な計画だった筈だ。——けれど、その計画こそが、全ての歪曲の始まりであった。

みなつきとうけんじゅつ
未那月刀剣術師範代並びに エリアズ A R A s 代表・ みなつきみき 未那月美紀著『日常歪曲譚』より抜粋。

00

「これでようやく……」

かむろゆうせい
神室夕星は全能感に満たされていた。指先を動かす度に「完成」に近づいていく姿の前に、笑みを漏らしてしまうのも仕方のないことであろう。

五〇〇以上のパーツから成るヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの荒武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシンの名は、

「何をしてるのよ、貴方はッ！」

脳天を突き抜ける衝撃は、浸っていた空想のことごとくを破壊して、夕星を現実へと引き戻す。

「うぐッ!?」

そのまま夕星は前のめりに転倒。広げてあった工具諸々をバラ撒きながらに額を打ちつけた。

バラ撒かれた工具は、プラスチック用片刃ニッパー（税込五二八〇円）、スポンジヤスリ六〇〇番から一二〇〇番（合わせて税込七一五円）

そして、丹精込めて作り上げたプラモデル。一／一〇〇（エクステンド）（税込一二八〇〇円）だ。

「ッッ！」

夕星は咄嗟に身を捻り、落下するエクステンドを受け止めた。床に衝突するまでの距離はわずかに数ミリ。

これはギリギリセーフといったところか。アンテナの先端部など、折れやすい箇所が無事であることを確認した夕星は、振り返って、自らを背後から殴りつけたであろう人物を恨めしそうに睨んだ。

「痛ッ……いきなり、何すんだよッ！」

そこに立つのはボブカットの少女だ。

丸っこい猫目を細めた彼女は、負けじとこちらを睨み返す。

「いきなり何も、学校に来てまで玩具で遊んでる夕星が悪いんでしょ！」

そう、ここは私立天川あまのがわ高等学校・二年一組の教室であった。

やいのやいのと言いつつ二人の元にはクラスメイト達の視線を集めるが、それもほんの一瞬のこと。「またクラス一のバカと、委員長が何か揉めてるんだ」と理解した全員が見飽きた日常から視線を逸らす。

「玩具って……だから何処も言ってるだろ！ このへエクステンド」はただの玩具じゃないって！」

夕星の目の下にはマーカーペンで引いたような濃いクマがあった。これは寝る間も惜しんでへエクステンド」を制作していた証である。

キットを手に入れから今日で三日だ。一秒でも早く完成品が見たかった夕星は空き時間を見つけては、それが何処であろうとも制作を続けていた。

それだけの熱意と愛情を注ぎ込んだのだから、へエクステンド」は既にただの玩具に非らず。誠心誠意作り上げた一つの作品、或いは夕星自身の分身とさえも言えた。

けれど、そんな想いが他者に理解されるわけもなく。

「何言ってるの。こんなの、ただの玩具じゃない」

彼女には最後まで正論で返されてしまった。終いには「学級委員として、生徒指導に報告しなくちゃならない」と脅されたので、泣く泣く広げた工具を片付ける羽目になってしまった。

「畜生……ヒバチはロマンってもんがわからねえからなあ……」

「聞こえてるわよ。あといい加減、ヒバチって呼ぶのもやめてよね。小学校の頃のアダ名で私のことを呼ぶのなんて、もう貴方くらいのものよ」

ヒバチ。基い藤森陽真里ふじもりひまりは不服そうに眉根を寄せた。二人の関係性を有体に表するのであれば、「腐れ縁」或いは「幼馴染」と言うのが適切であろう。

けれども、二人の性格は鏡合わせのように違っていた。

首元が苦しいからという理由でネクタイをダラリと緩めた夕星と、学校指定のブレザーを規定通りにキッチリと着こなす陽真里。二人の対称性は制服の着こなしの一つにも現れている。

「はあ……だけど、何というか意外よね。中学ではあんなに荒れてた貴方が、更生してオタク趣味にのめり込むなんて」

「悪いかよ。日本の漫画やアニメーションは世界に誇れる文化だろう？」

「別に卑下する意図はないわよ。私だってゲームは好きだし、ソシャゲのガチャで推しが出るか出ないかに一喜一憂してるくらいだもん。けどね、貴方の場合はのめり込み方が極端だ

って言ってるの!」

確かに夕星は小さい頃から、何かとハマりやすい方であった。

中学の頃とはガラリと様変わりした自室のことを思い出す。壁に貼ってあったグラビア写真はアニメのポスターに様変わりしたし、筋トレ器具は軒並み漫画雑誌やライトノベルに置き換わった。

先月には遂にプラモデルやフィギュアを飾るためのショーウィンドウを購入したくらいだ。

「色々買ってるみたいだけど、お金、大丈夫なの?」

「うっ……そ、それは……」

一ヶ月分のバイト代を全て趣味に費やしたことが彼女にバレれば、やれ「貯金しろ」だの、やれ「もっと計画的に使え」だの、お説教を食らうことは目に見えているのだ。

「だいたい、この子はいくらしたの?」

陽真里は片付けようとした〈エクステンド〉をヒョイと摘み上げ、訝しそうに尋ねた。

「おい、ヒバチ! そんな雑な持ち方すんなよ! 下手に触って、壊れたら俺の三日間の努力が!」

「ヒバチじゃなくて陽真里だって言ってるでしょ! けど、そうね……確かにすごく精密だし、三〇〇〇円ってところかしら?」

「えっ……いや、それは」

「五〇〇〇円とか? それともまさか七〇〇〇円もするんじゃない?」

税込一二八〇〇円だなんて口が裂けても言えるわけがない。夕星の額には冷や汗が浮いて、次第に顔も青くなってゆく。

「えっ、えっーと、半額セール品で五〇〇円くらいかなあ……」

「うん、貴方の表情でだいたい分かったわ。多分、一〇〇〇〇円くらいしたのね」

当たらずしも遠からず。呆れ返った陽真里は重苦しく嘆息を吐いた。

「私だって、アニメや漫画の中のロボットを手にとってみたいって気持ちは十分に分かる。ほんの一時でもフィクションにのめり込みたいって気持ちもね。だけどさ、この〈エクステンド〉の場合、」

彼女の言葉を遮るように校舎が揺れた。

次いで、開け放たれた窓からは研ぎ澄まされた轟風が吹き込んでくる。

「……はあ、また来たみたいね」

外を見れば、何か巨大なシルエツトが滑空し、校舎を飛び越えて行ったのだと理解できた。けれど、クラスメイトたちが反応を示すことはない——まるで、それが彼らにとっての「日常」であるように。

高度を下げたシルエツトは、やがて大通りに爪先を降ろした。全身の緩衝器を稼働させながらに着地しようとする様は、夕星たちの教室からでも伺える。

ヒト型の内部骨格と全身を覆う強化装甲群。

機械仕掛けの荒武者を思わせ、据えられた双眸を翡翠色に煌めかせた姿は、陽真里が手にしたプラモデルをそのまま大きくしたようであった。

「だけどさ、この〈エクステンド〉の場合は、」

陽真里は戦闘体制を取ろうとするマシーンを見つめながらに、途切れていた言葉の続きを紡いだ。

「本物がすぐその現実にいる。ノンフィクションの産物じゃない」

01

頭部装甲に「EXTEND」と印字されていたから、鉄の巨人はそのまま〈エクステンド〉と呼ばれるようになった。

詳細なスペックや搭乗者の有無は不明。全長は二五メートル前後、重量は五〇トン程度と推定。いつ、どこで、誰が、何の為に建造したのかも解っていない。

つまるところ——一ヶ月に一度、上空からあまのがわ天川市に降り立つこの存在について、判明していることは何もないのである。



〈エクステンド〉に対し、向かいの空からも同スケールの何かが迫って来る。

同じように大気を揺らし、市街地に影を落としながらに。けれど、着地の仕方だけはまるつきり正反対であった。

〈エクステンド〉が接地の瞬間に緩衝器サスペンションで被害を抑えたのに反して、あとから現れた何かは自らの巨体を街に叩き続けたのだ。ビルを薙ぎ倒しながらに粉塵を巻き上げる様は、己が力を誇示しているようであった。

そして、粉塵が晴れた先でその姿が徐々に明らかになってゆく。
まず着目すべきは両腕に備えられた巨大なハサミだ。次いで、全身を真っ赤な甲殻が覆っていることに気付かされた。

「今月はザリガニの怪獣なんだな」

クラスの誰かがそんな風に呟いた。

口元にブクブクと泡を蓄えながらに〈エクステンド〉を威嚇する姿なんて、幼少期に池で捕まえたザリガニそのままだ。

〈エクステンド〉の明滅するカメラアイと、ザリガニ怪獣の複眼が睨み合う。実際にはただ

向き合っているだけなのかもしれないが、少なくとも夕星にはそう見えたのだ。

「へへ、面白くなってきやがったぜ」

ハサミから繰り出される挟撃を掻い潜り、分厚い甲殻をどう打ち破るか？ その瞬間を見逃さないために、夕星は窓際へと駆け寄った。

身を乗り出しながらに興奮を隠しきれない自分の姿を端から見ればテレビの特撮番組に食い入る子供のようにも見えてしまうのだろう。

だが、そんな姿は陽真里を怒らせる要因になり得た。

「こらッ！ 何で見入ってるのよ！」

またも夕星の頭には、彼女の鉄拳制裁が下される。

「ツツ……痛ってえ！ こんにやろう、また叩きやがったな！」

「叩きもするわよ。休み時間にこっそりとプラモデルを作る程度ならまだ理解できるし、
〈エクステンド〉が好きだって気持ちも尊重する。だけど、暴れ出すところを楽しそうに観戦するのは不謹慎でしょ！」

「暴れ出すって……〈エクステンド〉はいつも怪獣から街を守ってくれるじゃねえか。それに、あの辺はシェルターも多い地域だから被害だって少ないだろうし」

「言い訳しない！ 被害が多いとか、少ないとか、そういう問題じゃないでしょ！」

実際、陽真里の持つ価値観の方が正しく、模範的なのであろう。

だが、夕星たちの中では「巨大ロボットと謎の怪獣が現れては殴り合いを繰り返す」という非現実的なフィクションが、半ば、現実的なノンフィクションへと変わり始めていた。確かに三年前、初めて〈エクステンド〉が現れ、怪獣と乱闘を繰り広げた際には、自衛隊の戦闘機が飛び出すは、米国がミサイルを持ち出すはの大パニックへと発展した。

けれど、「喉元過ぎれば何とやら」というのが人の性である。この三年間で避難マニュアルが浸透し、避難用シェルターが増えるに連れて、皆が次第に危機感を忘却していったのだ。「一か月に一度は怪獣が現れ、〈エクステンド〉が多少の苦戦をしながらも倒していく」というテンプレ通りのシナリオも、危機感を忘れさせる要因になり得たのだろう。

そんな少し歪な現状は、夕星のクラスメイト達からも伺える。校内放送に従って廊下に整列しながらも、「ラッキー。午後の授業が潰れる」程度にしか考えていない生徒が半分。行きつけのモールや普段使いの駅が踏み潰されないか心配する生徒がもう半分。

そして、夕星のような物好きで例外な生徒だけが〈エクステンド〉がどのような奮闘を魅せてくれるかに期待していた。

「それにさ、不謹慎どうこうを言い出すのならなら、あの人はどうなんだよ？」

陽真理をなるべく刺激しないよう注意しながらも、夕星は校庭の方を指差した。

そこにあるのは拡声器を手に、白衣を纏う女性教員の姿だ。

『行きなさい〈エクステンド〉！ そこよ、そこがチャンスよっ！』

先程の夕星が特撮番組に食い入る子供のようなら、ありったけの声援を届けようとする彼女は、さながらヒーローショーに盛り上がる司会のお姉さんのようであった。

見ようによっては夕星たち以上に不謹慎である。加えて彼女は二十七歳なのだ。

そんな大人を生真面目な幼馴染が許すわけもなく。両手を口元に添えた陽真理は、拡声器に負けないほどの大声を張った。

「何ふざけるんですか、未那月先生ッ！」

その声に養護教諭の未那月美紀は「ビクン！」と肩を震わせる。

『おっと……そこに居るのは藤森委員長に神室くんではないか。放送にしたがって避難しなくてはダメだろうに！』

「今更、教師らしい振る舞いで誤魔化そうとしたって無駄ですからねッ！ それに生徒の避難を促すのも貴女の仕事でしょう！」

『うぐっ……流石は謹厳実直な私の可愛い生徒だ。やはり舌先三寸は通じぬか』

「とにかく早く戻って来て下さいッ！ 先生がクビになっても、私たちは知りませんからねッ！」

陽真理は今日で一番の重苦しい溜息を吐き出した。

「うん……流石にあれば未那月先生が悪いし、ヒバチの気持ちも分かるかもな……」

夕星は自身のことを「まあまあの変わり者」だと認識しているし、お節介焼きの陽真理のことは「まあまあのお好き」だと思っている。

けれど、あの教員だけは「まあまあ」で収められる程度の変人ではなかった。

半年前から赴任してきた彼女が起こした問題は数知れず。愛車のシボレーカマロで校庭に突っ込むは、カツアゲされている生徒を助ける為に他校の不良をボコボコにするはで、一昔前の学園ドラマに出てくるヤンキー教師そのまんまなのである。

今日みたく愛用の拡声器を持ち出して〈エクステンド〉を応援するなんて奇行も可愛いもので。昨年度には廃部寸前だった映像研を巻き込んで〈エクステンド〉を題材とした百二十分の長編ムービーを作成。それを何処かのコンクールに出した結果、最優秀賞を取ったらしいのだ。

けれども、そんな彼女の破天荒っぷりに魅せられてしまう生徒は多く。美しい顔立ちと相まって、男子生徒からは絶大な支持を得ているのが現状であった。

「けど、不思議だよな。PTAや教員委員会の目がやたらと厳しいこのご時世に、どうして先生はお咎めなしなんだ？」

「そんなの私を知りたいくらいだよ。理事長の孫娘だとか、実は指折りの天才だとか、色んな噂は飛び交ってるけど、どれも信憑性は定かじゃないし」

「ふーん……じゃあさ、〈エクステンド〉や怪獣を調査する為にやって来たどっかの工作人員

だったり!」

「バカ。だったら、どうしてそんなスタッフが何の変哲もない私たちの学校に潜入して、養護教諭のフリをしているのよ?」

陽真里の正論を受けて、夕星も我に帰ってきた。確かに、今の仮説は自分でも「ない」と呆れてしまう。

そんなことを考えている間に、向こうでは〈エクステンド〉がザリガニ怪獣を翻弄していた。背面に備えられたブースターが蒼炎を吐き出して、振り上げられたハサミを回避。さらに流れるようなモーションで、鋼鉄の拳を叩き込むのだ。

「あっ、」

きっと今のが決まり手になったのであろう。頭を潰されたザリガニ怪獣はそのまま崩れ去り、〈エクステンド〉もそれを見届けると、空の彼方に飛び去ってしまった。

「今月はやけにあっさり勝ったな」「五、六限も潰れねーじゃん」なんて愚痴りながら、廊下に出ていた生徒たちも教室へと戻って来る。

「はあ……あのロボットは、どうして私たちの日常に現れたのかしら?」

そんな風に陽真里もぼやく。

「どうしてって、そんなの」

わざわざプラモデルを手に入れるほどのだから、夕星だって〈エクステンド〉の正体について様々な仮説を立てたことがある。

怪獣たちは地球侵略にやって来た宇宙人の尖兵で、〈エクステンド〉はそれに対抗すべく天才博士の作り上げた叡智の結晶だとか。

遠い未来から人類滅亡を防ぐ為に送られて来たオーバーテクノロジーだとか。果ては異世界から来たのではとも考えたが、所詮はミーハーオタク少年の妄想の域を出ないのだ。

「別に何だって良いだろ。今日だって俺たちの街を護ってくれたんだし、カッコいいんだから、それで十分だ」

結局、謎は謎のまま。夕星にとっての凡庸な「日常」は過ぎてゆくのだった。

02

放課後。夕星はバスに揺られながら隣町を目指していた。

手にしたスマートフォンには唯一の悪友から「遊びにいこうぜ」とメッセージが届いている。

「『集合場所はいつものゲーセンでいいよな?』……っと」

そこまでのLINEを打ち終えた夕星は車窓へと視線を移す。前方を進むのは迷彩色を纏うトラックだ。さらに前方にも同じような車両が数段並んで、ちよっとした渋滞を作っていた。

三年前、初めて「エクステンド」が怪獣を倒した際に、残された死骸をどうするかが問題となった。二〇メートルを超える巨大生物の死骸を放置出来るわけがない。さらには各国の研究機関がこぞって死骸を欲しがり、外交問題一歩手前の大騒ぎへと発展したのだ。けれど、この問題は意外な形で解決を迎えることになる。——死骸が、何の変哲もない砂塵になってしまったのだから。

当時の研究者たちはこぞって度肝を抜かれたことであろう。「怪獣を構成する筋繊維や骨格が、何の変哲もない砂塵になる訳がない」というのが研究者たちの総意であったが、事実としてそうなってしまったのだから、彼らも口を噤むことしか出来なかった。

これも「エクステンド」や怪獣の正体が謎のままである要因の一つであるが、街に残された砂塵は、誰かが回収して処理しなくてはならない。

「多分、アイツらの行き先も隣町なんだろうな」

あのトラックたちは、降り積もった砂塵を然るべき保管施設へと運ぶための車両なのだろう。

もっとも最近では回収した砂塵を保管するスペースが足りなくなって、海洋の埋め立てなんかに使っているという噂なのだが……

『悪い。ちょっと遅れそうだ』とLINEを打てば、『了解』という簡素な返信が届いた。まあ、アイツのことだ。数十分くらいの時間は適当に潰すはずだろう。

夕星はLINEを閉じて、各種SNSを開く。

そこで「「エクステンド」と検索ワードを入れたなら、昼間のザリガニ怪獣との奮闘をカメラに収めた画像が大量にヒットした。中には間近のローアングルで撮ったと思われるものや、機体各所のメンテナンスハッチや装甲同士の継ぎ目が見えるようなものまである。

「へへっ、やっぱり大きなメカは下から撮るように撮るのが一番映えるよな」

いつもは「不謹慎!」とお説教をしてくる幼馴染様も、今日は委員総会らしく学校に残ったままだ。

つまり、今の夕星を邪魔する奴は誰もいない。

お気に入りの画像をダウンロードし終えた夕星は、ルンルン気分で鼻歌を奏でるのであった。



トラック群は別ルートを使うようで、渋滞を抜け出たバスは程なくして駅前へと停車する。

そこから歩いて四、五分程度。夕星は行き付けのゲームセンターに辿り着いた。

自動ドアを潜れば、店内の喧騒感が夕星の心を踊らせる。そして、ざっと店内を見渡せば、一際目立つスペースに設置された筐体の前でレバーを握る男子生徒を見つけた。

夕星の羽織る黒ジャケットとは正反対な白学ランは、進学校で知られる明王高校みょうおうのものだ。けれど、夕星は物怖じすることもなく彼のゲーム画面を覗き込む。

「おっ、やってるな」

画面の中で派手なエフェクトと共に映し出されるのは、〈エクステンド〉と怪獣の姿だ。

これは〈エクステンド〉を題材にリリースされた格闘ゲームなのだから、画面に〈エクステンド〉や怪獣が映ること自体に不思議はない。が、プレイヤーを示すカーソルには違和感があった。

矢印が怪獣の方を指しているのだ。しかも彼が軽やかにコマンドを打ち込めば、対峙する〈エクステンド〉のヒットポイントがガリガリと削られてゆく。

「ああ、バカ！ そんなことしたら、〈エクステンド〉が!?!」

夕星が発した悲痛な声も画面の中までは届かず、〈エクステンド〉が爆発のエフェクトに轟沈した。

画面にデカデカと表示されるのは「YOU WIN」の文字。それを見届けた彼は得意げな笑みを浮かべて、こちらに振り返る。

「見たか夕星？ この俺の華麗なるスーパープレイを！」

彼は鳥居十悟とりいじゅうご。夕星の中学からの悪友であった。

オールバックの髪と猛禽のように鋭い瞳は、相変わらず他者へ威圧感を与えるものだ。けれど、彼の浮かべる人懐っこい笑みは、それすらも帳消しにしてしまう。

寧ろ、可愛らしいイケメンに見えてしまうのが若干ムカつくくらいだ。

「特に最後の決め技のコンボ。これを決めるために毎日三時間も練習したのさ」

進学校の生徒が勉学や部活に精を出さず、放課後ゲーセンに通い詰めるのはどうかと思うが、コイツは昔からこういう奴だった。

地頭が良いからテストで困ったなんて、経験をしたこともないのだろう。

「あーもう、わかったから！」

ウザ絡みしてくる悪友を押し退けながら、夕星は向かいの筐体へと腰かけた。

真っ先に〈エクステンド〉を操作キャラに設定。五〇〇円玉を入れて対人モードを選択する。

「おっ、いきなりか？」

「こっちは大好きな〈エクステンド〉が一方的に倒されるところを見せられたんだ。一人のオタクとして黙ってられるかよ」

「なるほどな。けど、それはあまり賢い選択とは言えないぜ」

「んだよ……?」

「コンピュータが操作する推しが俺に負けるより、自分で操作した推しが俺に負ける方がショックも大きいだろうと思ってさ」

十悟も操作キャラのカブトムシ怪獣を選択した。投げ技を主体のカブトムシ怪獣は、遠距離も対応した〈エクステンド〉に対して不利となる。

わざわざそんなキャラを選ぶのは、きっと十悟なりの挑発なのだろう。

「上等だ。その喧嘩買ってやる」

夕星の交友関係は限りなく狭く、その原因は中学時代につるんでいた不良仲間たちと縁を切った故だった。

その選択自体に後悔はない。けれど、十悟とだけは唯一縁を切ろうと思えなかったのだ。

「ほらほら、ガードが甘いんじゃないか？」

「クソ！ キャラ相性ならこっちの方が有利だつてのに！」

十悟は中学の頃から、成績も運動神経もズバ抜けていた。絶対に口に出すつもりはないが、彼には懂れてしまうところも多くある。

「このッ！」

そんな悪友に対し、夕星がゲームでくらい一矢報いたいと思うのも当然であった。

画面の中の〈エクステンド〉はかなりダメージを食らったが、お陰で必殺技のゲージも満タンになっている。勝負を賭けるなら一瞬だ。

「なあ、十悟。お前の学校でも教えてもらえないことを一つ教えてやるよ」

夕星は素早く筐体のレバーを弾き、必殺技のコマンドを挿入する。

「勝負事はいつだって、ビビったら負けなんだよッ！」

筐体のスピーカーが一際に大きな打撃音を吐き出して、カブトムシ怪獣が画面の向こうまで吹っ飛んだ。〈エクステンド〉の連撃からのアッパーカットが炸裂したのだ。

「よっしゃ！ 見たかよ、これが〈エクステンド〉の本気だ！」

「マジか……これは手痛いな。けど、勝負は三ラウンド制。まだまだ喜ぶのは早いだろう？」

十悟はほんの一瞬目を丸くするも、すぐに余裕を取り戻してみせた。

「フン、だったら速攻で二ラウンド目も取らせてもらうだけだ！」

大丈夫。次のラウンドも同じようにカウンターを狙えば、カブトムシ怪獣に大ダメージが与えられる。

けれど、十悟は唐突に思わぬことを聞いてきた。

「ところでさ。夕星はやっぱり幼馴染の陽真里ちゃん派か？ それとも養護教諭の未那月

先生派？」

「ブツツ———!？」

全く予想外な角度からの質問に、夕星は噴き出してしまう。

「なっ、何だよ、いきなり！」

「だから、陽真里ちゃんと末那月先生のどっちがタイプかを聞いてるんだよ。二人は天川あまのがわ高校の二大美人ってことで有名なんだぜ。末那月先生に至ってはうちの高校にもファンクラブがあるほどだし」

「まじかよ……」

昼間のように、普段から末那月の奇行を見せられている夕星からすれば、ファンクラブを作る連中の気が知れなかった。それに気になるのは、寧ろ――

「ちなみに俺は陽真里ちゃん派かな。中学の頃は同じ生徒会の役員同士だったわけだし」

「はあっ!？」

そういえばそうだったと思い出す。当時の十悟は不良であったにも関わらず、女子生徒から多くの得票率を確立し、生徒会長の地位に登り詰めたのだ。

ちなみに陽真里は「十悟のアホを一人にしたら何をしでかすか分からん」との理由で、教師たちから半ば強制的に副会長の地位に押し上げられていた。

「なあ、夕星。幼馴染のお前が良いって言うのなら、今度陽真里ちゃんをデートに誘おうと思うんだが、どう思う?」

「なっ、なんで、そこで俺の許可がいるんだよッ! 大体、わっかんねーな! ヒバチみたいな口煩いだけの女のどこが良いんだか?」

けれど、陽真里の横に十悟が並ぶ姿を想像して。それが何故だか、面白くなかったのだ。

「はい、隙あり!」

そんなことを考えていたからであろう。画面の中の〈エクステンド〉はピタリと動きが止まっていた。

当然、そんなチャンスを十悟が見逃すわけもなく。二ラウンド目は彼にあっさりと奪われてしまった。

画面に大きく表示された「YOU LOOSE」が尚のこと哀愁を際立たせる。

「おいコラ、十悟ッ! 俺を動揺させようとワザと変な質問をしやがったなッ!」

「ははっ。それは言い掛かりじゃないか? プレイヤー同士の駆け引きも、ゲームの醍醐味のだろうに」

向かいの筐体から顔を覗かせた十悟は、ニンマリとほくそ笑んでいた。

先程は人懐っこい笑みと評したが、訂正しよう。見る人間の神経を逆撫でする悪辣な笑みだ。

「よし、わかった……テーマを絶対泣かしてやる」

そう決意した夕星が再び、レバーを力強く握ろうとした瞬間だ。

今日で「二度目」となろう轟音が空を裂いて、鼓膜の奥を震わせた。――画面の外で、本物の〈エクステンド〉が飛来したのだ。

〈エクステンド〉が街に現れるのは一ヶ月に一度だけ。だから、空を裂くような轟音が響き渡るのも、一度だけで——本来は「二度目」の轟音など、鳴り響くわけがなかったのだ。



ゲームセンターから飛び出した夕星は、その圧倒的スケールを目撃する。

何本かの道路を跨いだ先に〈エクステンド〉は着地した。全身の緩衝器サスペンションが伸縮。背中に集約した排熱口からは熱を帯びた白煙を吐き戻す。きつと機体内部へと籠ってしまった熱を、逃がしているのだろうか。

「すっげえ！」

これほど間近で、〈エクステンド〉を見るのは初めてだ。二五メートルを超えたマシンは影を落とし、ローアングルから見上げることになった夕星は高揚を抑えきれなかった。

機体のパーツ一つ一つから細部の塗装剥げに至るまで、〈エクステンド〉の全てを脳裏に焼き付けようと、目を凝らす。

「バカ！ 何してるんだ！」

少し遅れて、十悟じゅうごもゲームセンターから飛び出してきた。

「何って、〈エクステンド〉がすぐ傍で見れるんだぞ！ このチャンスを逃すわけにはいかないだろ！」

「はあ……お前は筋金入りの〈エクステンド〉オタクってことを忘れてたよ。けど考えてみな、〈エクステンド〉が来たってことは、次は何が来るかを」

そう、〈エクステンド〉が飛来したからには、対峙する存在が現れるのが常だ。

向かいの空からも轟音が迫り、〈エクステンド〉の正面に着地。相も変わらずビル群を薙ぎ倒しながらに、ソイツは粉塵を舞い上げた。

当然、二人の視線もその姿へと。粉塵が晴れて、露へとなっていく怪獣の姿へと集約される。

けれど、そこには違和感があった。

「ちょっと待て……あの怪獣、何かおかしくないか？」

十悟の言葉通り、現れた怪獣の様相はこれまで〈エクステンド〉に倒されてきた他の個体とは何かが違う。

昼間現れたザリガニ怪獣のように、今日まで現れてきた怪獣たちは何らかの生物をそのまま巨大化させたかのような存在であった。

対して、今現れた怪獣はどうであろうか？ シルエットこそアスリート然とした男性らしいものだ。しかし、全身はゴムのような質感の皮膚に覆われているだけで、甲殻や鱗らしい被覆が何もない。

のっぺりとした頭部には幾何学模様のラインが走るだけで、それは無機質な不気味さを滲ませていた。

「たしかにちよつと変かもしれないねえけど、〈エクステンド〉はあんな奴に負けねえよ。いつもみたいに、こう、バーンって感じで勝つに決まってる！」

「そうだといいんだけどな……とにかく、あの二体に近いのは危なすぎる。どこかの安全なところに身を隠すぞ」

十悟は急かすように、夕星のジャケット袖を引く。

だが、その判断は僅かに遅かった。得体の知れない怪獣が〈エクステンド〉へと掴み掛かったのだから。互いの巨体が全力でぶつかり合えば、相応の衝撃が街を駆け巡る。

その余波は瓦礫や乗り捨てられた車両を軽々と跳ね上げ、夕星たちの小さな体さえも弄んだ。

「うおっ!？」

二人は衝撃に絡めとられ、宙に舞い上げられてしまったのだ。夕星は咄嗟に額を庇うも、すぐに重力に引かれて、間近にはアスファルトが迫り来る。

「ツツ……!？」

次いで自身を襲うのは衝撃と鈍痛であった。

「痛つ………おい十悟ッ！ そっちは大丈夫か！」

「ギリギリ！ 運がよかったみたいだ！」

彼の白学ランには汚れ一つ付いていなかった。きっと、あの土壇場で華麗に受け身を取ったのだろう。自分は思い切り頭を打ちつけたというのに、この悪友は本当になんというか……

「下手に動くのはかえって危険だ」と、無言で顔を見合わせて、二人はその認識を共有する。

周囲に落下の恐れがある看板や、千切れる恐れの高圧電線がないことを確認した二人は手頃な建築物の陰へと身を滑り込ませた。

「悪いが夕星、俺は〈エクステンド〉のことも嫌いなりそうだよ」

「なら、掌を返す準備をしておくんだな。〈エクステンド〉がああ怪獣をぶっ倒す瞬間に備えて」

嵐が過ぎ去るのをじっと待つように、二人はこのまま事態をやり過ぎすつもりだった。

だが、それは〈エクステンド〉が怪獣に勝利すると言う前提の防衛策でもあった。現に夕星は、〈エクステンド〉の勝利に何の疑いも持っていない——これまでの日常がそうであったのだから。

「大丈夫。〈エクステンド〉は負けねえよ」

不意に怪獣が構えを変える。上腕で腰から上をガードし、小刻みなステップを踏むために爪先を上げたのだ。

その立ち姿はまさしく、ボクシング。怪獣の振る舞いもボクサー然としたものに豹変する。剥き出しの拳には、グローブが嵌められているじゃないかと錯覚する程に、その型は胴に入ったものでもあった。

「けど、なんで？」 夕星たちがそんな疑問を口にするよりも早く、怪獣はショートジャブの乱打を繰り返す。

「野郎ッ……けど残念だったな！ 〈エクステンド〉の全身を覆う装甲は単純な打撃程度、効かねえんだよ！」

装甲と拳が擦過して、両者の間には淡い火花が散った。

それでも〈エクステンド〉は夕星の言葉通り、堅牢な装甲を盾にカウンターを狙う。

「ラッシュュが途切れた瞬間がチャンスだ！」

「いや……ちょっと待て、夕星！」

一発目の拳を打ち込んだ時点で、あの怪獣も〈エクステンド〉の頑強さや打撃技の効きの悪さに気づくチャンスがあった。

それでも拳を撃ち続けるのは、あの怪獣が本当にボクシングしか出来ないからなのだろうか？

「あの怪獣は他の怪獣とは何かが違う……俺にはアイツが何かを狙っているように思えてならないんだ」

そんな十悟の予感は見事に的中した。

怪獣がまた構えを変えたのだ。〈エクステンド〉がカウンターを放つために無防備にならざるを得ない、そのコンマ数秒を狙って。

ボクシングの構えがスピードと連撃をウリにしているのなら、その構えは先ほどの真逆。足裏でキツく地面を噛み締め、腰の捻りから繰り出された張り手は中国拳法の「発勁」であった。

「なっ……!?!」

パン！ と衝撃が爆ぜる。

打撃を受け止めた腹部装甲は簡単に剥離した。それはまるでガラス細工を砕けるように。機体を支えるフレームが断裂、引きちぎれたコードや機体を巡る液状燃費が臓腑の如く飛散する。

脇腹を抉られた〈エクステンド〉が膝を着こうと、怪獣の勢いは止まらない。

もう一撃。容赦なく打ち出された発勁は〈エクステンド〉の頭部を引きちぎってみせた。胴体から強引に撥ねられた頭部は山なりの弧を描き、やがて夕星たちのすぐ側へと飛来する。

「危ないッ！」

咄嗟に十悟に腕を引かれた。今、腕を引かれなければ、夕星は飛んできた〈エクステンド〉の首に潰されていただろう。

「……………う、嘘だよな」

落下したそれは最早、頭部とわからない程に大破していた。装甲板が怪獣の掌型に凹み、カメラアイは数度明滅するも、そのまま彩度を失ってしまふ。

今この瞬間——数多の怪獣を倒し続けてきた〈エクステンド〉が、初めて怪獣に敗北したので。

04

いつだったか、「誰かが怪獣をデザインしているのではないか？」という俗説が流行った事がある。

今から三年前——初めて現れた怪獣はトカゲをそのままスケールアップしたような個体ながらも、体格は一五メートル前後と、一回り小さな姿をしていた。

だが、次に現れた怪獣は二〇メートル前後に巨大化し、二二、二三と怪獣は現れる度にその体軀を刻んでいった。

そして、カブトムシ怪獣が現れた時期を皮切りに、今度は強固な甲殻を纏うようになり、〈エクステンド〉の装甲にも劣らない防御力を獲得したので。

怪獣を倒すと、次はもっと強い怪獣が現れる。だから、「そこに何らかの意思があるのではないか？」と考察するのも解る。

けれど、この説も所詮はネット上で盛り上がった俗説に過ぎず、信憑性もオカルト的な都市伝説や、誰かの陰謀論程度のものであった。

だが、誰かが本当に怪獣をデザインしているのなら。そのデザイナーはこう考えたのではなからうか？

「重い甲殻を纏ったところで、結局〈エクステンド〉に砕かれてしまふのならば。いっそ、余分なウェイトを脱ぎ捨ててより「闘う」ことに特化した怪獣を創るのはどうかと」

そんな願望の果てに産まれた怪獣が、あの怪獣だったとしたら——



夕星は目の前の現実絶句してしまふ。

揺らぐ視線の先にあるのは、ただの鉄屑と化した〈エクステンド〉の残骸だ。ひしゃげた装甲の隙間から滴るオイルはドス黒い血液のようで、それは壊れた機械というよりも、死に

絶えた生物を思わせる。

「……………」

その鉄屑に手を伸ばすも、〈エクステンド〉は指先が触れた途端に、きめ細やかな砂塵と化して崩れてゆく。

残されるのは、山形になった砂だけだ。そして、頭部と同調するように、向こうで残された首から下のボディもまた砂塵となって消えてしまう。

「な……なんで」

夕星の理解は追いつかなかった。

倒された怪獣の死骸が砂塵となって崩れていくのは、原理が解らなくとも納得できる。

「きつと怪獣だけが持つ未知の体組織が、」と頭の中でそれらしい仮説を立てられるからだ。

だが、〈エクステンド〉は明らかな人工物だ。最先端のテクノロジーの集合体とも言える人型マシーンがどうして怪獣と同じように砂塵と化して消えてしまうのか？

そもそも夕星は、「〈エクステンド〉が怪獣に敗北した」という事実自体を受け入れられずにいた。

「おい、夕星！ しっかりするんだ！」

十悟が激しく肩を揺さぶった。それで、夕星もようやくと我に帰る。

「悪いが、今はショックに受けてる場合じゃなさそうだぞ……見ろよ、アイツの方を」

怪獣は、次なる標的を目の前に聳えるビルへと移したらしい。腰を入れて踏み込むようにして放ったのは、空手の「突き」だ。

ボクシングや中国武術のみならず、空手まで会得しているとは。ビル窓には亀裂が走り、拳との衝突部に生じたクレーターからへし折れてゆく。

「俺たちは想像しなくちゃいけないのかもな。〈エクステンド〉が負けた後のことを」
そうだ。

夕星は想像する。これまで勝ち続けてきた〈エクステンド〉が負けてしまったあとの日常がどうなるかを。

あの怪獣は破壊の限りを尽くすのであろうか？ 或いは人を捕らえ、食らうのであろうか？

どう思考を巡らせたって、辿り着くイメージは廃墟となった街と、犠牲となった人々の山であった。

今更ながらに陽真里の警告を思い出す。「〈エクステンド〉と怪獣の闘いを楽しむのは不謹慎である」と。

きつと自分は幼稚で、彼女は真つ当だったのだろう。そんな時、不意に怪獣が動きを止めた。両腕をダラリと下げたまま沈黙する。

もしかしたら街を壊すのに飽きて、このまま帰ってくれるのでは、と淡い希望を抱くのも

束の間であった。

怪獣の顔が横に裂け始めたのだ。そこから覗くのは鋭利な牙と、テラテラと粘液質な輝きを放つ舌。

「フッ……フッ……」

怪獣が口を開けたのだ。そして、発音を詰まらせながらも何か言葉を紡ごうとする。

「フジ……フジ……モリ」

口が縦へ、横へと形を変えて。

「フジモリッ……ヒッ……ヒマリ……」

フジモリヒマリ。——そのワードは夕星の中ですぐさま「藤森陽真里」の名へと変換される。

「アイツ今、陽真里ちゃんの名前を呼んだよな？　けど、どうして……って、おい夕星!」
今度は思考を巡らせるよりも速く、身体が動いていた。ほとんど条件反射のように。夕星は弾丸の如く、走り出す。

「ツッ!」

だが、虚しいかな。怪獣が再び歩き出せば、その振動で足元が揺れ、夕星は派手に転ばされた。

怪獣はそのまま向こうへと。夕星たちの通う天川高校へと進路をとった。

たしか陽真里は、委員総会で今頃も学校に残っている筈だ。だとしたら、あの怪獣は何らかの器官を用いて陽真里の居場所を補足しているのではないだろうか？

「あの野郎……させるかよッ!」

直観はほとんど確信へと変わった。

「十悟、この辺りに駐輪場はなかったか！　このまま走っても、とてもじゃねえが間に合わねえ!」

「いや、何言ってるんだよ」

「だから駐輪場はなかったか聞いてるんだ！　緊急時なんだ、前科が付くのも構うもんか。とにかく自転車でもバイクでも盗めるもんを盗んでヒバチを助けに行くッ!」

「夕星、少しは頭を冷やせ……仮に都合よく自転車やバイクを盗めたって、それでどうやって追いつくんだよ」

「それでもッ!　あの怪獣はハッキリとヒバチの名前を呼んだ！　それに何故かアイツにはヒバチの居場所もバレてるんだぞ!」

既に夕星の頭の中を埋めるのは、陽真里のことだけだ。

彼女を助けに行かなければ。そんな想いだけが先走る。

「じゃあ、夕星。俺もハッキリ言わせて貰うが、お前は陽真里ちゃんの元に駆けつけたとして、それが何になるんだよッ!　どうにもならないことくらい少し考えれば解るだろうが

ッ！」

十悟のぶつけたてきたそれは、どうしようもないくらいの正論である。

相手は鉄の巨人を容易く壊してみせる怪獣。対する自分は中学の頃に多少荒れていた程度で、ミィハーオタク趣味を持つだけの高校生だ。スクールも何もかもが違いすぎる。

「それとも、お前には何かあの怪獣を倒す作戦があるのか？」

そんな作戦が思いつけるのであれば、既に行動に移している。

何も思いつけないからこそ、こうやって言葉に詰まっているのだ。

「もしも、あの怪獣を倒せるだけの力が自分にあったなら」と、そんな願いが頭の片隅をよぎった。

「あの怪獣の脅威から陽真里を守れるのなら、自分はどうなっている」と、そんな願いを胸のうちに強く抱きしめる。

——けれど、「願いごと」は所詮「願いごと」に過ぎない。

「畜生……ッ！」

夕星は募る苛立ちを吐き捨てようとして、ふと自分の足元に少量の砂塵が付着していることに気づかされた。

〈エクステンド〉を形作っていた、あの砂塵だ。

初めは転んだ拍子にくっついて来たのかと思った。だが、それも違うということにすぐに気付かされる。

無数の砂塵は夕星の足元を伝い、気づけばずっと背負ったままになっていた鞆へと集まって来たのだ。

「おい、夕星……それって」

十悟も異変に気付いたようだ。そして次の瞬間に、鞆から何か飛び出す。

「うおっ!？」

鞆へと集まっていた砂塵も、宙へと飛び出したソレに続いた。さらに向こうの路地からは〈エクステンド〉の首から下を形作っていたであろう砂塵の波が押し寄せて、ソレを中核に何かを形作っていく。

「お前は……!」

夕星にはソレの正体がすぐにわかった。砂塵の中核は、自分が寝る間も惜しんで作り上げたプラモデルであると。

やがて、寄り集まった砂塵はヒト型の内部骨格と、全身を覆う強固な装甲群を完成させる。

両腰には二丁の突撃機銃を備えながらも、全身が刃物のように研磨された姿は機械仕掛けの荒武者を思わせた。

翡翠色の相貌を備えた、そのマシンの名は、

「〈エクステンド〉——!」

夕星の声に応えるよう、鉄の巨人は今再び立ち上がる。

プラモデルを中核に再構成された〈エクステンド〉には傷一つ付いていない。金属的な鈍い輝きを放つ全身は、それが砂塵で出来ていると思えない程であった。

「嘘だろ……〈エクステンド〉が蘇ったのか……」

十悟はその光景に、理解が追いつかないという顔で絶句する。

理解が追いついていないのは夕星も同様であった。ただ、それと同時に妙な納得感もあった。まるで、こうなることが予め決められた確定事項のような気がしてならないのだ。

そんなことを考えると同時に〈エクステンド〉の巨体が跪き、マニピュレーター 掌の先を夕星へと差し出した。

さらに頭部を覆う装甲が展開。大きく口を開くようにして、その内側を露わとする。

「まさか、お前……」

そこに在ったのはちょうど人が一人収まりそうなシートと、一対の操縦桿だ。

空の操縦席を曝け出した〈エクステンド〉はただ鎮座して、己が主を静かに待ち望む。

「俺に『乗れ』って言いたいのか？」

上等だ。

「あの怪獣を倒せるだけの力が欲しい」と願い、その願いが通じた結果が、このチャンスだというのなら、躊躇う理由もなかった。

「待て、夕星！」

歩み出そうとする夕星の腕を、十悟が掴む。

「〈エクステンド〉はさっき負けたばかりじゃないか！ それに陽真里ちゃんだって馬鹿じゃない。仮に学校に残っていたとしても、あの怪獣が来ることを知ればすぐに避難するはずだろ！」

例え、困惑の中にあろうとも、十悟の主張は最後まで正論であった。

夕星の周りの「頭のいい奴」は揃いも揃って、正論を振りかざす。それはきつと自分以上に周りが見えているからなのだろう。

だが、今回ばかりは夕星も譲る気がなかった。陽真里を狙う怪獣はこれまでの怪獣と何もかもが違っているのだ。だから、どんな脅威が彼女に降りかかったとしても、おかしくはない。

「悪いな十悟。俺はヒバチが……いや、陽真里が傷付く可能性があるのなら、例えそれが一

パーセントにも満たない確率であろうとも、それを許容することができないんだ」

「なんだよ、それ……確かに俺だって陽真里ちゃんのことには心配だ。幼馴染であるお前が、彼女に特別な想いを秘めることだって知っている。ただ、さっきから聞いてれば、陽真里ちゃん、陽真里ちゃんって熱くなり過ぎなんだよっ！」

十悟の猛禽のような瞳がキツく眇められた。

けれど、その瞳に込められた思いは、敵意や苛立ちではなく、自分へと向けられた不安と心配であった。

彼は夕星の襟首を掴み上げ、強く揺する。まるでどこかおかしくなってしまった自分を正気へと戻そうとしているようでもある。

「悪い、十悟」

だが、夕星はその腕を払い除けた。

「俺にとって陽真里はただの幼馴染じゃねえんだ。増して、『好き』とか『嫌い』とか、そんなチープな言葉で表せるほど、俺の内心は安くねえんだよ」



中学に上がって間もない頃、夕星の両親は揃って蒸発した。どうせ、しょうもない理由なのだから、二人が自分を捨てたワケなんて知らないし、知りたくもなかった。

それでも当時は多感な時期だ。自分の中学生生活が荒れ果てることもある種の必然であった。

手当たり次第に、詰まらないことをしている連中を殴り倒して、憂さ晴らしに勤める。いかにもガラの悪そうな上級生や、愚連隊まがいな高校生たちと正面を切って喧嘩をしたのだって一度や二度じゃない。

無論、そんな日々を送っていれば絆創膏や生傷と共に、自分へ向けられる冷ややかな視線と偏見ばかりが増えていく。

いいや。あれは偏見などではなく、他者の認識する「神室夕星」という人物像そのものであったのであろう。

だが、彼女だけは——藤森陽真里だけは、しつこく付き纏うことを止めようとしなかった。

何度拒絶しようとも、「幼馴染だから！」という詰まらない理由だけで、彼女は傷の手当てをしてくれたのだ。

ロクに授業に出ようとしなかった自分に、勉強を覚えてくれもした。

「夕星はもう少し日常を好きになった方が良いよ。世界はフィクションとノンフィクションに溢れてるんだから。辛いなら、フィクションに逃げたって良い」

「子供みたいに幼稚な願い事や幻想を抱いたって、目の前のノンフィクションに押しつぶされるよりはマシなんだから」と。

そんな風なお説教を、何度も食らったことを覚えている。

そして、また少しずつ時間が過ぎっていった。中学を卒業するくらいの頃には、喧嘩の傷が顔から綺麗に消えていた。

どこで道を間違えたのかオタク趣味に目覚め、お金の使い道について叱られることも増えたが、それで良かったと思う。

少なくとも今の自分は何処にでもあるような日常を、心の底から楽しむことができたのだから。



「きつと陽真里がいなくちゃ、俺は両親以上に無責任な大人になってたと思うんだ。だから、寸でのところで俺を引き止めてくれたアイツには、返しきれないくらいの恩がある」

だから、彼女を助けたいのだ。

「泥沼の底にいた自分を彼女が救ってくれたように、今度は自分が彼女を救わなければならぬ」という、ただそれだけのシンプルな理由が、夕星の手足を動かす原動力となり得た。

トルクを上げたエンジンのように火照ってゆく気持ちも、鋼のように固い覚悟もすべては彼女を想うからだ。

「……陽真里ちゃんがお前に求めている想いは、そんな呪縛みたいな恩義じゃなくて、もっと単純明快なものだと思っただけだな」

夕星には、そこに込められた真意を読み解くことが出来なかった。

ただ、十悟もこれ以上、自分を止めようとしぬい。その代わりに、握った拳を差し出してきた。

「分かった、お前の好きにすれば良いさ。(エクステンド)に乗って、あの怪獣を殴り倒すのも、陽真里ちゃんを助けるのも、好きにすれば良い。——ただ、一つ条件を付けさせてくれ」

「……条件？」

「ちゃんと、勝って戻ってくるんだ。格ゲーの決着ついてないだろ？」

そういえば、お互い一ラウンドを取ったまま決着がついていなかった。

「お前なあ……」

それを言うのは今じゃないだろうに。本当にこの悪友は……

ただ、おかげで張り詰めていた気持ちも解れた。

「いや、そうだな。俺の操る(エクステンド)が怪獣なんかには負けやしねえよ！」

夕星も同じようにして拳を差し出す。そこで交わしたファイト・バンプからは、小気味の

良い音が鳴った。



ゆっくりと装甲が降りてきて、夕星を収めたコックピットは静かに閉ざされる。

ほんの一瞬、視界が闇に包まれるも、すぐにシート背部から顔の半分を覆うようなヘッドセットが現れ、額へと装着された。

これを介して、外の光景を窺い知るのであろう。

「ロボットものでよくある網膜投影とか、視神経のリンクみたいな奴なんだろうな」

夕星の視界に映し出されるのは、外の景色だけじゃない。機体の電圧や油圧など、様々な数値を示すパラメータが投影された。

複雑な数値の羅列ばかりが視界を埋め尽くしていく。だが、夕星には何故だかその意味が理解できるのだ。

「まさか……戦い方を教えてくれるのか？」

操縦桿をどのように倒して、足元の踏板をどう蹴れば、機体がどのような挙動をするかに至るまでの必要な情報の全てが、ヘッドセットを通して脳内に流れ込んでくる。

それどころか、すこし懐かしい感じまで……

「電圧チェック。油圧チェック。」

コックピットに備えられたスイッチを一つ、また一つと入れていく。その動作に一切の逡巡はない。

「エンジン回転数・正常ノーマル。関節機構ロック解除。現実固定値センサーをアクティブモードへ

と移行——さあ、いこうぜ〈エクステンド〉ッ！」

06

スラスタ推進機が流れ星のような尾を引いて、機体は速度を上げてゆく。

大好きな〈エクステンド〉に乗っているのだ。きつと普段の夕星ゆうせいならば、沸き立つ歓喜を抑えきれなかっただろう。

「憧れの存在に登場し、街を守る」一人の少年として、そんな空想を思い描いたのだから一度や二度じゃない。

「いつも、こんなシチュエーションを望んでたっけな……」

だが、そんな脳内のフィクションは現実のノンフィクションへと成り果てた。

ゲームセンターの格ゲーで、〈エクステンド〉を動かすのとは訳が違う。操作レバーとボ

タンの代わりに握り締めた一対の操縦桿は相応に重く、足を掛けた踏キックペダル板からはエンジンの微細な振動が伝わってくる。

こんなリアルを楽しめるわけがない。

「……待っていやがれ、クソ怪獣」

眇められた夕星の双眸は、レーダに映る怪獣の反応だけをキツく睨んでいた。

先走る苛立ちに応えるよう、翡翠に明滅するカメラアイも黒く巨大な人型を捉える。一度は「エクステンド」を大破させた、あの怪獣へと追いついたのだ。

「さあ、リベンジマッチと行こうじゃねえかッ！」

操縦桿を前に押し込めば、推進剤が燃焼し、機体がさらに加速する。その反動に息が詰まるも、「エクステンド」は握り締めた鉄拳は前へと突き出した。

大振りでも軌道も丸わりの喧嘩パンチは、さぞ避けやすかったことであろう。

怪獣は半身を引いて、素人丸出しの拳を躲してみせる——それが夕星のフェイントだとも気付かずに。

「悪いな、けど卑怯だなんて言わせねえぞ！」

「エクステンド」が素早く、右腰へと懸架された突撃機銃を引き抜いた。

咄嗟に回避した怪獣の正面はガラ空だ。夕星がトリガースイッチを弾けば、首元へと突きつけられた銃口が無数の弾丸を蹴り出される。

「ブチ抜いてやるッ！」

マズルフラッシュ

発火炎が瞳を焼かれ、銃声に鼓膜の奥を噛み切られようと、指先を緩めるつもりはない。
開いた口で今も尚、「フジモリヒマリ」と反芻し続けるコイツを黙らせるためならば——

少なくとも百発以上の砲火に晒してやったのだ。分厚い甲殻を持たない怪獣では耐え切れることも出来ないであろう。

だが、夕星は爆煙の向こうで奴が嗤っているような気配を感じた。それと同時に突き出されるのは、噛み付くような「発勁」だ。

「マジかよッ!？」

中華武術における発勁は、ただの打撃や張り手とは訳が違う。曰く、発勁の威力には、力の大きさと、それが作用した時間の積が深く関わるらしい。

プロボクサーの打撃の特徴が「鋭さ」と「速さ」にあるのなら、対して発勁は「重く」そして、力が加わる時間も「長い」。

結果としてその力積が、鋼の装甲をも打ち破る衝撃を生むのだ。

「このッ……!？」

既に怪獣の掌底は寸前まで迫っている。この間合いに入られては避わずことも不可能だ。

ならば、と夕星は腰を抜き、〈エクステンド〉の巨体を蹴つかせる。

爆ぜるような打撃に右肩を抉られたが、地面への設置面が増えたおかげで作用する力を足元に逃がせた。

だが、それでもダメージをゼロにできたわけじゃない。

「うぐっ……!!」

弾けて咲いた火花と共に肩部の装甲を抉り抜かれた。警告音アラートに混ざって、内部のパーツが砕けた音が鼓膜へと届く。

今ので電送系がイカれたのだろう。だらりと垂れ下がってしまった右腕はそのまま動かなくなってしまうた。

「……致命傷を避けたとはいえ、利き腕一本ってのは割に合わねーよな」

恐る恐る視線を上げた先にあったのは無傷な怪獣の姿であった。機銃による一方的な蹂躪を受けたにもかかわらず、喉元には銃創どころか、小さな傷の一つさえ付いていない。

「フジモリヒマリ」

怪獣はその名前を呼びながら、規律正しく並んだ牙を揃えて、ニツと嗤ってみせる。

「コイツ……ッ!」

不意打ちに失敗した時点で、コイツが一筋縄で行かないことはもう十分に理解できた。では、そんな相手に対し、右腕の壊れた状態で勝機があるのかだろうか？

『——そう、固くなるなよ』

不意に、そんな声をしたような気がした

『あっ、マイクテス、マイクテス』

いいや、気がしたのではない。ヘッドセットにはテレフォンマークが表示され、「何処かの誰か」との通信が接続される。

『聞こえているかな、〈エクステンド〉のエグジエーターくん?』

声の主は女性と思われる。ただ、その声はボイスチェンジャーによる露骨な加工処理が施され、ノイズ塗れの音声のように聞こえてしまう。

『君は彼なのかな? それとも彼女なのかな? まあ、どっちでもいいか』

どうやら、通信相手がどんな顔をしているのか分かっていないのもお互い様らしい。夕星は少し警戒しながらも、謎の声に応じることにした。

「……誰だよ、アンタ?」

ヘッドセット内に仕込まれたピンマイクを出しながらに、こちらも彼女の正体を探る。

「俺は神室夕星……悪いが、こっちは取り込み中なんだ。得体の知れない声の相手なんてしてる暇はねえぞ」

『カムロウウセイ……。ふふっ。なるほどね、やっぱり君の方だったか』

彼女の声はしぼし、意味深に黙り込む。僅かに「ジジ……ジジ……」と音が漏れるのは、通信機の向こう側で彼女が笑いを堪えているからだ。

「そのリアクション……アンタ、俺のことを知ってるんじゃない、」

『あー、いや。完全にこっち都合の話だから気にしないでくれたまえ。それに君の前には、もっと気にすべき相手がいるだろう？』

〈エクステンド〉の目の前では、怪獣が腰を下ろしながら、腕を後方へと引き絞っていた。「クソ……どうやら俺には、アンタが誰かを考える余裕もないんだな！」

『ははっ、そうみたいだな♪』

その笑い声は心底、腹立たしい。

怪獣は未だ無傷のまま。コックピットには得体の知れぬノイズまみれの声が響きわたる。

状況は好転するどころか、どんどん混沌ケイオスへと転がり落ちているような気さえした。

『まあ、そうイライラするなよ。神室くん』

「馴れ馴れしく呼ぶんじゃないねえ。つか、アンタのせいでイライラしてるんだからな！」

『それは心外だな。せつかくエゴシエーターとして覚醒したばかりの君に、あの怪獣を倒す方法のレッスンをしてやろうと思ったのにな』

夕星は眉を顰める。

今のが聞き間違いでないというのなら、彼女は怪獣の倒し方を知っているというのか。

『それとも君にはこう言った方が良かったかな？ 〈エクステンド〉に秘められた真の力を

——「スターレター・プロジェクト」から始まった奇跡の果てを、知りたくはないかな？』

何故だかは解らないが、夕星ゆうせいにはヘッドセットを介して〈エクステンド〉の操るのに必要な情報の全てが頭に流れ込んできた。

そんな自分でさえ、知り得ない機能がこの〈エクステンド〉にはあるというのか？

『まず前提として。〈エクステンド〉に備えられた二丁の突撃機銃は、私たちARRASエリァズが無理やり増設しただけの予備兵装に過ぎない。だから、その銃じゃ牽制こそ出来ても、君と同じエゴシエーターによって生み出された怪獣には通用しないんだ』

「待って待って、難しい専門用語がいっぱい出てきやがったぞ！ もっと俺みたいなバカでも分かるように説明しやがれ！」

『失礼。君にも分かりやすく説明するのなら、そうだな。—————いまの〈エクステンド〉

には、奴を倒せる武器が搭載されていないんだ。ただの一つもな』

夕星は今日まで〈エクステンド〉が怪獣に勝利する瞬間を幾度となく見てきた。けれど、その決着の全てが近接攻撃によって付いていたことに、今更ながら気付かされる。

では、あの怪獣を倒すには、近接に持ち込み、殴り倒すしかないというのか？

〈エクステンド〉の右腕は完全に壊れてしまっている。そんな状態で敵に素手の殴り合いを挑むなど、無謀としか言いようがない

「理不尽もいところだな、畜生ッ！」

落胆にくれようと、そんな事情を怪獣は知り得なかった。

伸ばされた両腕は、襟首の装甲を狙っている。

『おや、今度は柔道みたいだね』

「クソッ……！」

夕星は咄嗟に踏キックペダル板を蹴って、バックステップ。怪獣の爪は装甲をガリガリと削りながらも、〈エクステンド〉を捉えるには至らなかった。

だが、次も避けられるとは限らない。それどころか夕星の三管器官は機体の急性動によってよって激しい負担を掛けられていた。

「うっぶ……」

内臓をシェイクされて覚えたのは、激しい吐き気だ。

何故ロボットもののアニメや漫画で、パイロットたちが揃いも揃ってスウェットのような専用のスーツを着込んでいるのか分かった気がする。あれは操縦者の貧弱な肉体を庇護するためにあるのだ。

「決めたぞ……この野郎を倒したら、絶対パイロットスーツを作るんだ。デザインもカッコよくて、機能性の高いヤツ！」

なんて自分を鼓舞してみたが、それは強がりにはかならない。

〈エクステンド〉には、あの怪獣に通じる武器がないのだから。

『おいおい、そう熱くなるなって。私たちA R A Sが願いを叶えるためには、まだ〈エクステンド〉を失うわけにはいかないんだ』

ノイズまみれの声が通信機越しに囁く。

『もちろん、乗り手である君もな。——それに言っただろう？ 私が〈エクステンド〉の真の力を教えてやるって』

「だったら、勿体ぶつてないで、早く教えやがれ！」

こっちにはもう後がないのだ。顔もわからぬ相手に言葉を選んでいる余裕もない。

「〈エクステンド〉が秘める力にはわかに信じ難いものだからな。どう伝えていいか、私も迷っていてな」

「この際だッ！ どんなミラクルでも信じてやるッ！」

向こうから聞こえる「ジジ……ジジ……」というノイズ。またも彼女は笑いを押し殺して

いるのだろう。

『ならば教えよう、〈エクステンド〉の備える真の力。それは「現実改変能力」だ』

「現実……改変だと？」

『現実固定値に干渉し、君たちの日常を歪曲させうる力だ。もちろん、制約もあるし、なんでも好き勝手にできるわけじゃない。ただ、そうだな』

効果の有効範囲は〈エクステンド〉を中心に半径一〇メートル程度。範囲内に存在する物質を一度砂塵に変換することによって、それらを材料に様々な武器を創り出すことができる、と彼女は語る。

『目には目を。歯に歯を。エゴシエーターにはエゴシエーターを。そうやって創られたエゴシエーター製の武器であれば、あの怪獣にも有効なはず』

正直、彼女の説明は半分も理解できなかったし、容易に受け入れられるものではなかった。それに〈エクステンド〉にそんなチートじみた力が備わっていると仮定しても、その力をどう開放すればいいのか？

夕星はコックピット中を見渡したが、それらしいスイッチを見つけることは叶わなかった。

「じゃあ……その現実改変能力を使うにはどうすれば良いんだよ？」

『簡単さ。君はただ目を閉じて、願うだけでいい。それだけで簡単に願いは叶うんだ』

「そんな、都合いいわけ、」

『そんな、都合いいわけがあるだろ？ 君は既に「願い」の力で砂になった〈エクステンド〉を作り直してみせたんだから』

しばしの沈黙の後に、夕星は深呼吸することにした。

一度力を抜いて、解れ掛けていた集中の糸を紡ぎ直す。そうすれば、思考も次第にクリアーに漉き取っていくのがわかる。

何が、願いは簡単に叶うだ？ そうであれば、誰も苦労はしないのだ。

だが、夕星はその僅かな可能性に縋らなければならない。あの怪獣を倒し、陽真里を守る為には――

「アンタの言い分はわかったよ……イチかバチか、やってやろうじゃねえか！」

瞳を閉ざし、願いを明瞭にイメージする。それに応えるように、辺りの建造物が砂塵と化して〈エクステンド〉の元へ集約された。

そうやって形作られるのは紛れもない、一本の刀剣である。

『日本刀を模した実体剣か。ふふっ、王道を征くねえ』

翡翠色をした双眸のカメラアイは輝きを増し、目の前の敵を睨みつけた。

対峙する怪獣が取るのは、前腕で上半身をガードするコンパクトな構えだ。ここにきて始まりのボクシングに戻してきたか。恐らくは刃による初撃を躲し、カウンターを狙う魂胆であらう。

「上等だ。勝負事はいつだって、ビビったら負けなんだよ」

勝負は一瞬だ。創造した刃の間合いに怪獣が飛び込んでくる。その一瞬で、「解除ッ！」

〈エクステンド〉は刀を投げ捨てた。掌マニピュレーターから離れたそれは、また一瞬で砂塵へと崩れ去った。

きっと、怪獣は〈エクステンド〉の手元を存分に警戒してくれたのだろう。「わざわざ、武器を捨てるなんて、何かある」と。だからこそ、怪獣はその足を止める。

「フェイントに二度も乗せられんなよ」

再び周囲の建造物が崩れ、砂塵が〈エクステンド〉の左拳を覆った。即席のボクシンググローブだ。

タイマン。殊更、正面からの殴り合いとなればこちらも望むところなのだ。

さらに壊れた右腕を補強するように砂塵を集約。ギプスを形作り、無理やりにでも動かしてみせる。

「これで終わりだッ！」

夕星は機体の右脚を振り上げた。

三度舞い上がった砂塵は脛部に新たなブレードを創造し、〈エクステンド〉は渾身の胴回し蹴りを放ってみせる。

08

鉄脚一閃。——真横に裂かれた怪獣は砂塵と化して、崩れ墜ちてゆく。

だが、夕星ゆうせいはその一部始終に目もくれようとしなかった。代わりに各部のセンサーをアクティブに、機体の全機能とカメラアイを介して閑散とした街中を見渡す。

そして、ようやくと見つけたのだ。

「……よかった」

ズームインした先には陽真里ひまりがいた。両掌を口元に当てて、逃げ遅れた人へ避難を呼び掛けているのではないか。

「……つたく、さっさと避難すれば良いだろうに。こんな時までクソ真面目なのかよ」
何気なしにポケットからスマホを取り出せば、無数の通知が届いていた。

そのほとんどが彼女からのメッセージだ。「貴方は今どこにいるの?」「ちゃんと避難してる?」という心配から始まり、最後の方は「早く返信しなさい!」「無視すんな!」と苛立っているのが伺える。

「はは、無茶言うなよ」

こっちは〈エクステンド〉に乗って、怪獣と戦っていたのだから。

きつと彼女は、自分が怪獣に狙われていたことなんて知りもしないだろうし、これからも知らなくていい。

身体を浸すのは心地の良い疲労感だ。そこで夕星ははじめて安堵の息を漏らすことができた。

「とりあえず、一件落着……で良いんだよな？」

スマホにはさらに新着の通知が届く。今度は十悟じゅうごからメッセージだ。

『下を見てみる』だ？』

小首を傾げながらも、〈エクステンド〉の視線を足元へと下げれば、いつのまにやら一台のバイクが停まっていた。そこに跨る白学ランの少年は紛れもない十悟本人である。

「おーい！ ター星ー！ 気づいてるかー！」

「マジかよ……コイツ」

仮にも進学校に通う生徒がノーヘルメットでバイクに跨る姿はそう滅多に見られるものじゃない。夕星もすぐに〈エクステンド〉の膝を折り、コックピットを覆う装甲板を開いた。

「どうしたんだよ、そのバイク？ まさか、どっかの駐輪場から盗んできたんじゃない？」

「ばーか。お前じゃあるまいし、道端に乗り捨てあったやつを借りて来ただけだよ」

いや、それは大して盗んだのと変わらないような……

「つか、バイクじゃ追いつけねえし、危ないから止めろって言ったのもお前じゃなかったか？」

「あれ、そうだったかな？ けど、世の中には抜け道ってもんが幾らでもあるからなあ」

十悟はそう言ってニヤリとほくそ笑んだ。一体、どんな裏技を使って追いついたのだから。

この悪友は時にとんでもない事を思いつくから恐ろしいのだ。

「それよりも」と前置きをした十悟は、膝立ち姿勢の〈エクステンド〉を興味深く観察し始めた。

「〈エクステンド〉の足元に、こんな飛行機の翼みたいなパーツって付いてたか？ しかも片脚だけってバランスも悪いだろうに」

彼が目をやったのは、〈エクステンド〉に増設された脚部のブレードだ。

「えっと、そいつは……なんて言えば良いんだろうな」

夕星は少しどう伝えれば良いか迷いながらも、〈エクステンド〉に搭乗してからの一部始終を話すことにした。

自分には何故か機体の操縦方法が、手に取るように理解できたこと。そんな自分でさえ分からなかった〈エクステンド〉の真の力を、謎の声が教えてくれたこと。

どれも眉唾には信じ難い話であるが、いちいち突っ込んでいてもキリがない。十悟は相槌を打ちながら話を聞いてくれた。

「なるほどな……他に気づいたことはあるか？」

「ノイズ塗れの声がなんか難しい単語をいろいろ使ってた。ARASエリアーズとか、エゴシエーターとか。あとは……なんつか、あの独特な喋り口調をどこかで聞いたことがあるような気がするんだよ。あっちの反応も俺の名前を知っているようだったし」

そう言えば、あのノイズまみれの声との通信もいつの間にか途切れていた。

用があるときだけ語りかけてきて、全てが終われば一方的に切ってしまうとは、勝手な声だ。

「聞けば聞くほど分からなくなりそうだな……まあ、とりあえず、その頭の奴を取ろうぜ」「頭の奴？」

「そのゴツイVRゴーグルみたいな奴だよ」

夕星はそこでヘッドセットを付けたままであることに気づいた。あまりに自分の顔にフィットするから忘れていたのだ。

ヘッドセットを外せば、陽光が直に瞳へと差し込まれた。その眩しさに瞼を開けては、閉じてしまう。

「ふう、さすがはへエクステンド。ヘッドセットの着け心地も一級品だぜ……って、」
そこで、ふと自分の瞳を見つめた十悟が絶句していることに気づいた。

「おい、夕星……その目、ちゃんと見えてんのか!？」

彼は明らかに取り乱している。

「な、なんだよ、いきなり!？」

「いきなりも何もねえだろ。なんだよ、その歯車みたいな目はッ!」

歯車みたいな目？ そんな事を言われたって、夕星自身には自覚がない。見える景色がおかしくなったわけでもなければ、眼球に痛みがあるわけでもないのだから。

ただ、一つ違和感があるとすれば、向こうに暗い光しるの点があることくらいで、

「ん……なんだ、あの光は？」

不意に何かが右頬を擦過する。感じたのは僅かな痛みと灼熱感だ。

つー、と頬を伝う血滴の暖かさで夕星は理解する。——あの光の点が、まるでレーザーのように自分の真横を通過したのだと。

「……嘘だろ」

奇しくも光の射線はほんの数ミリ、ズレていた。頬を焼かれるだけで済んだのも、それが要因であろう。

光の飛んできた方からは、どうしようもない「敵意」と「殺気」を感じた。まるで赫灼に燃ゆるナイフの先端のようなソレが恐怖心を穿つ。

「……………嘘だろ……………嘘だろッ!?」

そして外れてしまった閃光は、自分の頬を穿つよりも先に、前へと立っていた十悟の胸を撃ち抜いていた。

もはや夕星には頬の痛み程度、どうでも良くなっていた。
悪友の胸には、まるで紅い大輪が咲いたと見紛うほどの血で濡れていたのだから。

09

糸が切られた人形みたく、十悟の身体は半回転しながらに濃淡なアスファルの上へと倒れ込む。

「ああ……………ああ……………ああッ!」

夕星は数秒の間を立ち尽くしてしまった。目の前で起こったことの意味を理解しなくなかったのだ。

けれど、目の前に広がるノンフィクションがそれを許さない。

「何だ……………!? ……何だってんだよ!」

我に返った夕星は咄嗟に彼の傷口を抑えるも、指と指の隙間から熱を持って血が流れ続けるばかりで、身体からはどんどん体温が失われてゆく。

「……………ざっけんなよッ」

めいいっぱい噛み潰した奥歯からは、軋むような音がした。

真っ赤に染まってしまった拳を握りしめ、ボソリとは呟く。

「なあ、へエクステンド! もう一度俺に力を貸してくれよ……………友達の仇を取りたいんだ!」

伸ばされた 掌 マニキュレーター は二人を庇護するようだった。

夕星は彼を抱きながらに、再びコックピットへと身を委ねる。そして、ヘッドセットを着し——

「お前が何処の誰かなんて知らねえし、興味もねえ。だけどな、十悟をやりやがったことだけは許さねえッからな!」

カメラアイをズームして、皓い閃光が迸った方へと視線を遣った。数一〇〇メートル先の色彩と画質のブレを修正。その仇敵の姿を脳内へ焼き付けようと、瞳を凝らす。

けれども、ソイツの姿は夕星の想像から遠くかけ離れたものであった。

「なっ……………!?!」

あの閃光の正体は何なのか? 恐らくは遠距離狙撃銃辺りであろうと夕星は当たりを付

けていた。

やや現実感に欠ける話かもしれないが、〈エクステンド〉のようなオーバーテクノロジーが存在しているのだ。未来的なビルライフルを所持していたとしても少し驚かされる程度で済んだのだろう。

しかしながら、夕星は自らの瞳を疑うこととなる。

「木の杖だ?!」

それはある種、SFの世界から飛び出してきた〈エクステンド〉とは対を成すようなものだった。

先端に宝石が嵌められ、金属片やリボンで仰々しい装飾が施されたそれはまさに、「魔法の杖」というのが称するのが相応しい。

〈エクステンド〉と対を成すのは、何も杖だけに留まらない。それを握りしめるソイツもまた夕星の想像を超える風貌をしているのだから。

細身で曲線的なシルエットからして、彼女が女性であることは間違えない。だが、からすば鳥羽のようなローブを羽織り、三角帽を目深に被る彼女の姿はまさしく、ファンタジー世界の「魔法女」であった。

「んだよ……なんだってんだよ、そのふざけた格好はッ!」

吠える夕星に反して、〈エクステンド〉のセンサーは過度な熱源を感知する。

「■■■■」

魔法女が握りしめた杖の先に現れるのは、複雑怪奇な魔法陣だ。きっと次弾を装填しているのだろう。

魔法陣の展開に合わせ、彼女の纏うローブと帽子の鏢がバサバサと靡く。まさに黒鳥が羽ばたくが如く。そして、ほんの一瞬。——彼女の双眸に埋まる、歯車のような瞳孔が露わとなった。

理解できていない現状に立たされるのは今日で何回目であろうか?

言葉を話す怪獣に、砂から復活した〈エクステンド〉。それに覆い被せるように、今度得体の知れない魔法女が現れたのだ。

デタラメで過剰積載な一部始終は、熱病に侵された最中に見る白昼夢か、はたまた稚拙な空想がぐちゃぐちゃに混ざり合っているようであった。

ただ、夕星はほとんど直観で言葉を紡ぐ。

「テメエがああノイズまみれの声が言ってた、エゴシエーターって奴だなッ!」

魔法女が閃光を撃ち放った。まるで「答える気はない」と言いたげに、光は直進する。

「クソッ……上等じゃねえかッ!」

ならば、夕星も闘争心のまま願うだけだ。

両脇に聳える二本のビルを砂塵へと変え、〈エクステンド〉の背後に創造されるのは一対

「むむむ……！」

短冊を模したメッセージカードの裏には「スターレター・プロジェクト」とあった。どうやら、どこかの企業が人工衛星を開発しているらしく、そこへ全国の少女から募集した「願いごと」を乗せて、宇宙へと打ち上げるようだ。

大仰なプロジェクト名に対して内容は呆気ないほどシンプルで、今の夕星ならばそれが企業の広報戦略であったことも理解できる。

けれど、当時の自分はまだ七歳になったばかりの子供だったのだ。「星に願いが届けば」なんて謳い文句を本気で信じていし、だからこそ、メッセージカードにも真剣に向き合った。

プロのスポーツ選手にもなりたいし、ゲームの世界大会で優勝もしてみたい。

ベルトを巻いてヒーローにだって変身してみたいし、ドラゴンと友達になるのも悪くない。

そうやって頭に浮かんだ「願いごと」を書いては消してを繰り返して、いつの間にか放課後になっていた。

何度も書き直したメッセージカードはすでによれきって、これ以上の書き直しもできないだろう。

「いい加減、決めないと」とぼやきながら、瞳を伏せた。そして「やはりこれしかない」と2B鉛筆を走らせる。

『カッコよくて大きなロボットにのってみたい』

夕星は自らが選んだ「願いごと」に満足し、席を立った。あとはこのメッセージカードを職員室で待つ担任に渡すだけだ。足早に教室を去ろうとした、すぐそこで――



どうして、今更あのとときのことを思い出すのだろうか？

「俺はたしか、あの時にヒバチと……」

夕星の意識は次第に明瞭になってゆく。頭には泥を詰めたような倦怠感こそあれど、目を開けられないほどじゃない。

ゆっくりと上体を起こしながら、辺りの様子を伺った。

「今、何時だよ？ ていうか、ここは……」

見慣れぬ一室だ。清潔感のあるベットから壁面に至るまでが全て真っ白で塗りつぶされている。

そして部屋の最奥には夕星のよく見知った人物が腕を組み交わしていた。愛用の拡声器を構えながら白衣を羽織る彼女など、養護教諭の未那月美紀みなつきみきに以外見たことがない。

『グッドモーニング。神室くん♪ ここは私たちの組織が保有する秘密基地の一室さ。変な所じゃないから安心して羽を伸ばしたまえ』

彼女の口調にもおかしな点は何もなかった。

だが、拡声器を通した彼女の声だけが、乾いたノイズまみれのものへと変貌する。

『ふふっ』

「な、なんで……!?!」

その声は（エクステンド）の操縦席で語りかけてきたあの声と全く同じものなのだ。

「ビックリしたろう？ この拡声器にはボイスチェンジャー機能が付いていてね。私の正体を隠したいときに重宝してるのさ」

こちらの困惑などお構いなしに彼女は続ける。ほくそ笑んで、謳うように言葉を紡ぐのだ。

「美人な保険の先生とはあくまでも仮の姿。今ここに私の姿を明かそうじゃないか！」

脱ぎ捨てた白衣の下から露わになったのは、彼女のスレンダーな体型を強調するタイトなスーツ姿であった。腰には大太刀の鞘を携えて、黄金のネクタイピンには「ARAs」の文字が綴られている。

「私の名は未那月美紀。——未那月刀剣術の師範代にして、秘密結社ARAs^{エリァズ}を指揮する者さ」

未那月が理解できない事やブツ飛んだことを口にするのは別に珍しいことじゃない。今だって、既知であるはずのフルネームをわざわざ名乗り直した理由は彼女にしか分からないのだから。

ただ、今回だけは「いつもの奇行」で済ませられる範疇を超えていた。大掛かりなサブライズにしたって、手が混みすぎているのだ。

「アンタ……一体、何者なんです!?!」

当然夕星の警戒心も跳ね上がる。ベットから降りると、自然に身を強張らせてしまった。ほとんど条件反射で拳を構えてしまう。

「おいおい、私は何者かは名乗ったばかりだろ？ それに困惑する気持ちも分からなくはないがまずは拳を下ろしてくれたまえ。お互い物騒なのはナシにしようじゃないか」

パツと両手を広げ、彼女は無抵抗の意を示す。

「ほーら、夕星君も拳を下げて」

「……わかったツス」

「よろしい。それじゃあ幾つかお話をしようか。そうすれば君が抱いている幾つかの疑問にも答えが出る筈だからさ」

彼女が指を弾けば壁面の一枚がスライドし、中からホワイトボードが現れる。

そこに彼女はアルファベットを四文字。筆記体のフォントでお洒落に「ARAs」と記し

た。

「ちなみにエリアズってのは略称で正式名称はっと」

結社の正式名称は「アンチ・リアリティー・オルタレーションズAnti・Reality・Alterations」。直訳すると「対現実改変機構」の意を示すということまで、米印付きで補足を入れてくれた。

けれど、それで結社の概要が伝わる訳じゃないのだ。「アンチ……リアリティー……あるたれーしょんず？」と夕星は首を傾げてしまう。

「現実はね、私たちが考えている以上に不安定で脆いんだ。何かきっかけがあれば世界の常識が容易く書き換えられてしまうことだってある。君にだって、一つくらいは心当たりがあると思うんだけど」

「キュツキュ」とペン音を鳴らしながら描かれたそれは、デフォルメされた怪獣と「エクステンド」の姿だ。

「例えば、三年前——私たちの世界には、怪獣という謎の存在と「エクステンド」という正体不明な巨大ロボットが現れた。これは本来、異常事態である筈なんだ」けれど、実際はどうだろうか？

確かに初めのうちは異例の事態に世界中が騒めいた。だが、いつの間にかそれが当たり前と化し、誰もがそんな奇妙な日々を日常として受け入れてるようになっていた。

まるで、何かによってこの世界の常識が歪められたように。

「それどころか「エクステンド」はプラモデルになったり、ゲームがリリースされたりと大衆にはヒーロ的な存在として受け入れられている。誰が作ったかも、何のために怪獣と戦うのかも分からない奇々怪々なロボットがだよ」

夕星もそう言われ、ハツとした。

彼女の言う通り、自分はなぜ当然のように「エクステンド」という存在を受け入れていたのか？ その理由を見つけることが出来なかったのだ。

「「エクステンド」は誰かが作ったロボットでもなければ、怪獣だって遠路遙々やってくるわけじゃない。両者は何らかの現実改変が起きた結果、この世界に産まれた存在なんだ

——そして、そんな存在たちを回収し、時には人々を守るために運用してきたのが私たち秘密結社ARRASってわけ♪」

夕星は必死にない頭で彼女の説明を理解しようと努める。だが、彼女の解説ペースは一向に落ちることがない。

一度ホワイトボードの内容を全部消して、「第二項 それじゃあ、どうして現実改変が起こるのか？」と新たな問題提起を始めてしまった。

「ちよっ、ちよっ！」

「テンポよく解説するからついてきてね。現実改変が起こる理由はズバリ、エゴシューター達のせいさ」

エゴシューター。その単語を彼女が口にするのも、これで何回目になるだろうか。

「神室くんはどっちかと言えば理系科目の方が得意だったよね」

彼女がつつらとホワイトボードに書き出したのは「 $1+1=2$ 」という誰にでもわかるような式だ。

「じゃあさ、例えば1って数字を2に書き変えてみよう。そうすれば式の答えも3に変わるよね。ここまでは理解できるかな」

「えっと……もしかして俺のことバカにしてませんか？　というか、これって現実改変が起こる理由の説明になってないような」

「いいや、これが大いに関係あるんだよ。この広い世界には現実固定値^{メルマー}ってものがあってね、この数値の合計が変動しない限りは、現実はいつだって平穩に保たれているし、日常だっていつまでも平穩に流れ続けている」

だが、彼女が先ほど彼女がやってみせたように式の数値が変動したら、どうなるだろうか？

「エゴシーターってのは一言で言うと、このメルマー値に干渉できる能力者のことを言うんだ。彼ら、彼女らは世界の不変数を書き換えて、自分の願いのままに世界を歪める危険な存在なのだよ」

だとしたら、十悟の胸を貫いた魔女にも説明がつく。杖を介して魔法らしき力を行使できたのも彼女がエゴシーターであったからだ。

きつと彼女はこの世界のメルマー値を変動させ、自らの存在を「魔法使い」へと創り変えたのだろう。

「さっ、説明を続けようか。エゴシーターには目覚める人間は皆例外なく、とある因子を持つていてね。我々は、因子を持つているだけの状態をフェイズⅠ。無自覚ながらも因子を目覚めさせ、メルマー値に干渉できるようになった状態をフェイズⅡ。そして自らの異能を完全に自覚し、思うがままに現実を歪められるようになった状態をフェイズⅢと定義している」

「ちなみにフェイズⅢに覚醒したら瞳孔に変化が現れるよ。目玉が歯車みたくなっちゃうんだ」とホワイトボードにイラスト付きで付け加えられた。だが、そこで夕星は一つの違和感を覚える。

「待ってください……ちょっとおかしいですよね」

「ん？　私の説明は分かりにくかったかな」

「いや、そうじゃなくて！」

未那月は〈エクステンド〉のコックピットで、まるで夕星自身があたかもエゴシーターに覚醒した人間であるかのように語りかけてきた。

さらに十悟からは、自身の瞳孔が歯車状に変形しているとの指摘を受けたのだ。

しかし、それでは話の前提がおかしくなってしまう。

「俺はエゴシーターじゃない！　増して現実を歪める力なんて」

「おっと、本当にそうかな？ 忘れたとは言わせないよ。君は一体、何の力を用いて、怪獣を倒してみせたのかを」

願いを叶える力だ。願いを叶える力を用いて、武器を創造し、敵を打倒してみせた。

けれど、あれは〈エクステンド〉に備えられた力であった筈で、
「あの時は君の理解を促すために、願いを叶える力はあたかも〈エクステンド〉の機能であるように騙ったが。すまない、あれは私の嘘だ」

「けど……俺はエゴシエーターの因子なんて、そんなものを手に入れた覚えも！」
「ところで神室くん。君はスターレタープロジェクトを覚えているかな？」

困惑する夕星に対し、未那月が言葉を被せた。

思い出されるのは夕暮れ色をした情景と、メッセージカードに書いた願いの記憶だ。

『カッコよくて大きなロボットにのってみたい』

その願いを忘れるわけがない。

「よく聴きたまえ、エゴシエーター因子を獲得する条件はたった一つ。あのイベントの参加者であったことだ」

未那月が鮮やかに腰から下げた大太刀を引き抜いた。

鏡面のような白刃に映り込むのは、歯車状に変形し廻旋する夕星の瞳孔である。

11

怪獣が初めて確認されたのは三年前であった。

けれど、ARAsが〈エクステンド〉を回収したのは、さらにその三年前へと遡る――

廃棄された工場区画で急激な現実固定値の変動と、周囲一体の建造物が砂塵と化したニ

ユースを聞きつけた組織は、未那月美紀と作業員・竜胆鈴華を派遣。そこで彼女らは降り積もる砂塵が鉄の巨人を形作っていく光景に邂逅した。

周辺にフェイズIIIへと覚醒したエゴシエーターの存在が確認されなかったことから、この存在はフェイズII以前のエゴシエーターが生み出したものと断定。

以降〈エクステンド〉は外付けの制御AIと武装を積載した上で、ARSSの「対巨大現実改変存在用・戦略兵器」として運用が為されてきたのだった。



「私たちが勝手に〈エクステンド〉を回収してしまったから、君は今まで自らの力を自覚せず、フェイズIIの未覚醒状態を維持してきたんだろうね」

けれど、夕星は〈エクステンド〉に乗り込むことで、自らの力を理解してしまった。

バイク運転が精々の高校生が、〈エクステンド〉の巨体を手脚のように動かした理由だってそこにある。

幼い夕星は『カッコよくて大きなロボットにのってみたい』と願ったのだから、その願いを叶えるため生まれたに〈エクステンド〉は他の誰でもない「神室夕星」に操れる存在でなくてはならなかった。

「それじゃあ〈エクステンド〉を作ったのは俺で、」

美紀が抜いた大太刀には、歯車状と化した自らの瞳孔が写り続けている。それこそがフェイズIIIのエゴシエーターへと覚醒した何よりの証明であった。

「あとからウチの研究員に能力の診断をしてもらおうと良い。あの怪物との戦闘中に私が提示した能力の概要や範囲は、あくまでこれまでに確認されたエゴシエーター能力の統計から予測したものだからね」

だとしてもだ。今の自分が宿すのは現実を歪め、願うままに願いを叶えてしまう力に他ならない。

ぐるぐると回る瞳孔は微かに震えてもいた。額からは冷たい汗が伝い、それが足元へと滴り落ちる。

「ちよっと休憩を挟もうか。色々いっぺんに話しちゃったら聞いている君も疲れたろ？」

話し疲れたように伸びをした美紀は、大太刀を腰に収め部屋を発とうとする。

「ま……待ってくれ！」

聞きたいことなら、まだ山程残っているのだ。

夕星は彼女の腕を掴み、呼び止めた。

「えっと、その……あっくソ！ 考えがまとまねえよ！」

「ふむ……だったら、この基地にある転送装置についての話をしよう。あれは指定した対象を瞬時に粒子へと分解し艇内へ収納できるわけだが、大量のバッテリーを食い潰すし、使用できる回数にも上限があつてね」

転送装置もエゴシエーター由来の物らしく、しかも複数の対象を転送したい場合には、それぞれを一度ずつ転送しなくてはならないそうだ。

けれど、彼女はこうして、こんなタイミングでその話題を切り出したのか？

「だけどさ、ちよっと変だとは思わない？ 私はあのとき〈エクステンド〉だけを回収して君を放り出すことも出来たはずだ。というか、仮にも秘密結社を名乗ってるわけだし、できることなら組織の存在自体を知られたくもない。それなのにだよ、わざわざ貴重な転送装置

のカウントを減らしてまで、君をここに招き、あまつさえ私は組織の秘密を包み隠さず明かしているんだ」

彼女はネクタイピンに彫り込まれた「A R A s」の文字を指でなぞりながら、天井を仰いだ。

だが、視線の先は天井程度では留まらず、もっと上の遙か彼方を見つめている。

「私たちA R S sの最終目的は、この世界を改変される前の正常な状態に戻すことだ。このままエゴシューターが好き勝手に現実^{メルマ}固定値に干渉を続ければ、世界にはそれだけの負荷が掛かる。そうやって負荷が掛かり続ければ、いつかはドカン！　なんてこともあり得るわけで。そんなバッドエンドを避けるためにも私たちはエゴシューターの真実を探求しているんだ」

「じゃあ、もし、その真実を見つけれなかったなら」

「世界が終わるかもね……ただ、残念なことに私たちの調査は停滞し続けているというのが現状なんだ」

現状を打開するには、いつだって何かきっかけを要する。

夕星が「陽真里を守りたい」と願い、大破した〈エクステンド〉を復活させたように。

未那月もまた何か、きっかけを探していた。

「単刀直入に言おう、神室くん。私はこの停滞した状況を打破するために、エゴシューターとして覚醒した君をスカウトしたいと思っている」

差し出されたのは、彼女の掌だ。向けられる眼差しは期待でとっぷりと満たされている。だが、夕星にはその手を掴むことができなかった。

〈エクステンド〉を初めて操縦した時に理解したのだ。操縦桿を握るのは、ゲーセンの操作レバーを握るのと訳が違うことを。

「俺に特別な力があることは解りました。この力を役立てれば、皆の役に立つってことも……ただ、俺には自信が湧いて来ないんです」

あの怪獣に勝てたのだから、ほとんどビギナーズラックのようなもの。同じようにやれる自信もない。

「それに俺は大事な親友を守れないどころか、巻き添えにしちまった。アイツは……十悟^{じゅうご}は、ただ俺を心配してくれただけだったのにッ！」

鼻腔には未だに血液の鉄臭さが染み付いていた。熱を持って流れる鮮血に対し、冷たくなつてゆく身体のことを忘れられるわけがないのだ。

「けど、君は結果として怪獣から多くの人々を守ってみせた。あの怪獣は何度も藤森^{ふじもり}委員長の名前を呼んでいたから、彼女を守るために戦うことを選んだじゃなかったのか？」

確かに、それも一つの事実だ。

だが幼馴染と親友に優劣を付けられる訳がない。夕星にとってはどちらか一人を守れたとしても、もう一人が傷ついてしまえば意味がないのだ。

「そういう問題じゃないんです！」

「というか、神室くん……君は何故か友達が死んだと思っっているようだが、彼は一命を取り留めているぞ。ちゃんと基地内の集中治療室に搬送して処置を行ったから、すぐにでも意識を取り戻すはずさ」

「へ……………？」

あまりにサラッと言われたものだから、思わず思考がフリーズしてしまった。

それからしばし、「十悟が一命を取り留めている」という一文を頭の中で反芻させて、夕星は素っ頓狂な声を上げる。

「えっと……それはマジなんすか？」

「マジもマジ。大マジさ」

「はああああ!? んなこと聞いてねえぞ！」

「言ってなかったもん。けど、悪くないサブライズだろ♪」

しれっとした態度で彼女は再び、夕星へ手を差し出した。

「実はな、私たちがエリアズ確認した限り、〈エクステンド〉と怪獣の戦闘で死者が出たケースは一件もないんだ。二五メートル級の巨体が殴り合っているのによ」

それは何故か？ という疑問に対し、彼女は一つの仮定を立てる。

「私が思うに〈エクステンド〉を生み出したエゴシエーターが、〈エクステンド〉に『そういう存在』であることを望んだからじゃないかな？」

幼い日の夕星は巨大ロボットに、人々を傷つけることを望まなかった。寧ろ、願ったことは真逆。当時の自分でさえ稚拙だと思いつながらも〈エクステンド〉には「正義の味方」であることを望んだのだ。

「確かにエゴシエーターの力は君のような少年が手にするにはあまりに大きすぎる力だ。けれど大きな力を振るったからといってそれが必ずしも最悪の結果に辿り着くとは限らない」

その話を踏まえて上で、彼女は期待に満ちた眼差しをする。

「神室夕星くん。この歪な世界を元に戻し、多くの人々を救うには君の協力が不可欠だ。だから私たちに力を貸してはくれないだろうか？」

現実改変能力という特別な力を使いこなす自信がないのも、十悟じゅうごを巻き込んでしまったという事実も変わることはない。

ただ、自分と、自分の願いから生まれた〈エクステンド〉にも出来ることがあるのなら――

——それと全力で向き合いたいというのが夕星ゆうせいの出した結論であった。

「よしっ！」

鏡の前で普段は緩めつばなしのネクタイを締めなおし、「A R A s」エリアーズの文字が刻まれたピンを止めながらに自覚した。

今の自分は「非日常」の側に立つエゴシーターかむろ神室夕星であると。



A R A sの基地内は広大だ。地下空間にアリの巢上に広がる施設は、作業員たちの居住スペースから売店に、果ては娯楽用のダンスホールまで揃っていて、全部を見て回るだけでも一苦労である。

「……というか、完全に迷ったな」

支給品の確認を終えたならブリーフィング室に来るよう未那月みなつきに言われていたのだが、前にも後ろにもあるのは一本の通路だけ。

「こんなことなら、事前に基地の見取り図でも貰っておくべきだったな」

そんなことを呟きながら通路を進めば、嚴重な鉄扉に突き当たった。

「エンジニアスタッフ以外危険立ち入り禁止」と張り紙をされた扉は、ここが目的地ではないことを暗に教えてくれている。だが、虎穴に入らずばなんとやらだ。仮に叱られることになっても、スタッフに道を教えてもらおう。

「ええい！ ビビったら負けなんだよ！」

思い鉄扉を押し開けて、夕星はその先へ飛び込んだ。

どうやらここは整備区画のようで。機材の行き交う騒音と、機械油の匂いが感覚を刺す。そして、夕星の眼前にはハンガーへ固定される〈エクステンド〉の巨体があった。

整備のために各部の装甲を取り外され、内部骨格だけになった姿からは寒々しい印象を受けてしまう。さらに壊れた右腕部をエゴシーター能力で無理やり補強し動かしたのが不味かったのだろう。〈エクステンド〉の右肩から先は取り外され、オーバーホールが始まる直前であった。

「まじか……」

巨大ロボットの整備に立ち会える機会なんて滅多にない。以前までの夕星ならば目をキラキラと輝かせていただろう。

ただ、今の夕星は少し違う。

「よし……少し、試してみるか」

「へエクステンド」の破損は全て、機体に搭乗していた自分の力不足が原因だ。ならば「元通りに直れ」と願いを込めてみた。

けれど、その願いが破損した右腕に届くこともなければ、「へエクステンド」が反応する様子もない。周辺の何かが砂塵に変わる気配もないままに、翡翠色のカメラアイは沈黙を貫き通す。

「やっぱりダメみたいだな……けど、それなら」

今度はポケットに手を突っ込んで、ハンカチの包みを取り出した。そして、両端を掴みながら「甘いものが食べたい」と願いを込める。

「これならどうだ」

ハンカチは端からサラサラとした砂塵に分解され、小さな球体を創り始めた。透き通るような色をしたそれは一粒のキャンディーだ。

この程度の能力行使であれば現実固定値の変動もごく僅かで、特に世界云々がという問題にもならないらしい。床に落ちる直前でキャンディーをキャッチした夕星はそれを口の中に放り込んだ。

「うげっ……俺、イチゴ嫌いなんだけどな……」

口に広がるのは苺の甘ったるさだ。やはり、現実には干渉するのも一朝一夕にはいかないらしい。

未那月からはA R A sに加入するにあたって様々な物品を支給された。小型通信機&GPS付き多機能ネクタイピンに、歯車状に変化した瞳を隠すための特殊コンタクト。そして何より重要だったのが、エゴシーター能力にまつわる調査資料だ。

資料には「フェイズIIIに覚醒したエゴシーターは、メルマー値に干渉することで願いを叶えることができる。けれども、願いが叶うのはあくまでも「結果」であって、その結果に至るまでの「過程」は各エゴシーターによって異なる」という旨の記載があった。

つまりだ。夕星の能力であれば、「物質Aを一度砂塵へと分解し、物質Bに再構築する」という「過程」を経て、願いが叶うという「結果」へ辿り着くのである。

ただ、そこにも幾つかの制約もあるようだ。

「質量の小さいものから大きいものを作ったり、逆に質量の小さいものから大きいものを作るのは無理なんだよな」

例えば、さっきのハンカチを握ったまま「へエクステンド」がもう一機欲しい」と願ったとしても、「へエクステンド」に創られるわけじゃない。

二五メートルを超える巨体を形作るには、それこそ基地の一面をまるごと砂に変える過程が不可欠なのだ。

さらに厄介なことに、この能力では同じ物質を複数回に亘って分解の対象にすることもできないらしい。

「えっと……俺は一度、『陽真里を守る力が欲しい』と願って、壊れた「へエクステンド」を、

動く状態の〈エクステンド〉に作り直したんだから」

だから、さっきみた「直れ」と願ったとしても、現実が歪むこともないのだ。

他にも〈エクステンド〉を起点として、半径一〇メートル以内でなくては能力が発動できなかったり、能力の酷使には体力を消耗したりと、課せられたルールはかなり多いように思えた。

けれど、現実を歪める能力としては妥当なデメリットの範疇。寧ろ緩すぎる制約に思える。「つまりは俺の工夫と、願い方次第なんだよな」

そこまで考えて、夕星はひとまず覚醒したエゴシエーターの力を前向きに捉えることにした。

それに驚くべきは、自分がベットで意識を失っている短期間でここまで能力を分析し、資料にまとめてくれたA R A M sの医療スタッフ達だ。正式名称の「対現実改変機構」は伊達ではないらしい。

そんな夕星の鼓膜に、よく聞き慣れた声が響く。

『ふーん……私を待たせた挙句、立ち入り禁止区画で油を売っているだなんて、呆れてものも言えないわね』

それは紛れもない、怒っているときの藤森陽真里のものであった。

「ひ、ヒバチ!? な、なんでお前がこんな所に!？」

背筋をなぞるような悪寒に慌てて振り返る夕星であったが、そこに生真面目な幼馴染の姿はない。

代わりにあったのはこちらに向けられた拡声器と、腰から大太刀を吊り下げる未那月のニヤケ面だ。

「ふふん。見事に騙されてくれたね♪」

「なっ……!？」

ずっと待たされていた彼女はついに痺れを切らして、夕星を迎いに来たのだろう。

この悪戯を思いついたのも突発的なのだろうが、それが妙にツボに入ったらしい。

『やーん、夕星のえっちー』『私ね、ずっと夕星のことがー』と、グリーンフィング室までの道順を案内される最中も彼女はずっと陽真理の声マネで弄ってくるのだった。



グリーンフィング室はとにかく書類に溢れかえっていた。最奥のデスクには紙の山が聳え立ち、壁一面を埋め尽くすように様々な調査資料がピンで留められている。

初めはファイリングして管理していたのだろうが、それが収まり切らずに溢れ返ってしまっただという印象だ。

「なんすか……この足の踏み場もない部屋は……」

「いやあ、日頃から片付けようと思ってるんだけどね。私も何分、潜入期間が長くって、こちの部屋はほったらかしになっていたんだよ」

「それにしたって酷すぎるでしょ。ていうか、今どき書面ってのもおかしくないですか？デジタル化して管理すれば」

「あっ、一応ここにある全ての資料はデジタル化してるし、基地内のデータベースからいつでもアクセス出来ようになってるよ」

「ならどうして、書面の方を残してるんです？」

「エゴシエーターの影響によってデジタル化された情報が全て改竄される恐れがあるから、こうやってアナログのバックアップを残しているんだよ。逆も然りだからデジタル化した情報も削除できないし、全く困ったものだね」

「ん……ちょっと待ってください。それじゃあ、デジタルとアナログの両方に作用する現実改変能力があった場合はどうするんです？」

「その場合は私たちの詰みだね」

未那月はいとも容易く、答えてみせる。

「考えてみたまえ、神室くん。私たちが立ち向かうのは歪んでゆく世界だ。日常が非日常に変わるのは一瞬だし、そもそも現実が歪んでしまったことに気付けない可能性だってある」
彼女の眼差しが、鋭利に細められてゆく。それは普段戯けてばかりの彼女が初めて見せた、真剣な表情かもしれない。

「だからね、私たちは常に先制しなきゃいけないんだよ。先手、先手を取り続けて、歪んでいく世界に立ち向かう必要があるんだ」

ピンと張り詰めたのは緊張感だ。一瞬の遅れが命取りになるのは、喧嘩ごとやゲームによく似ている。けれど遅れてしまった代償は、比べ物にならなかった。

「まっ、シリアスな雰囲気もここまでにして。そろそろ本題に入ろうじゃないか」
パン！ と手を打って、彼女は話を切り出す。

「神室くんがA R A sの一員になってくれたことは喜ばしいことだし、本当はエゴシエーターに纏わるアレコレにもゆっくり慣れてほしいと思ってるんだ。ただ、生憎と今のA R A sは、とある理由で一番のやりて工作員が抜けちゃってね。正直、ネコの手も借りたい始末さ」

要は夕星にも、さっそく働いて貰いたいということだろう。

彼女が先言したようにA R A sが常に先手を取り続けなければならぬというのなら、いきなり働かされること自体に異論はない。寧ろ、役に立てるのが嬉しいくらいだ。

ただ、組織に入ったばかりの自分にこなせる任務があるのだろうか？
荒事ならいざ知らず、潜入や工作といった活動は上手くやれる気がしない。

「そう身構えなくても大丈夫さ。これは君向きの調査任務……というか、神室くんしか適任者のいない任務だからね」

未那月は部屋中に散らばった書面の中から、なんの迷いもなく一枚の資料を拾い上げる。

「君の初任務は、この少女を徹底的に調べ上げることだ」

書面にプリントされたのは、模範通りにあまのがわ天川高校の制服を着こなした女子生徒の写真だ。だが、夕星は、ボブカットの髪型と丸っこい猫目をした彼女のことを既に誰よりも熟知している。

——そこに写る少女の写真は紛れもなく藤森陽真里だったのだから。

「……ヒバチですか」

思いのほか、夕星の驚きは小さかった。

エゴシエーター因子を獲得する条件は、「スターレター・プロジェクト」に参加すること。であれば、夕星と同じ小学校に通い、メッセージカードに願い事を綴った幼馴染がエゴシエーターに覚醒していたとしても、おかしくはない。

「やっぱりヒバチもエゴシエーターなんでしょうか？」

彼女の話が出てくることも想定の範疇だった。

「フェイズⅢに覚醒したエゴシエーターであれば瞳孔に変化が現れるだけでなく、現実改変能力を使用すると特別な信号を発するんだ。そこで潜入中の私は、信号の受信機を天川高校に仕込んでおいたのだが……残念なことに反応をキャッチできずに終わったよ」

「けど、逆に言えばヒバチも俺みたく能力を自覚していないフェイズⅡのエゴシエーターかもしれないってことですよね」

「ふふっ、飲み込みが早くて助かるよ」

エゴシエーター因子を宿したからといって、必ずしも誰もがフェイズⅡ以降の能力に目覚めるわけじゃない。

未那月たちA R A sは「スターレター・プロジェクト」の参加者リストを保有する。そしてリストを調査した結果、エゴシエーターに覚醒する前に、プロジェクトの参加者が死亡した例が幾つか確認されたのだ。

「宿したエゴシエーター因子が発現し、フェイズⅡに移行するタイムミングには個人差がある。それに我々の調査には、因子を宿したまま病死や事故死したエゴシエーターの例も少なくはない。『死に瀕した瞬間に、眠っていた力が』ってのは少年漫画の鉄則だが、世の中はそう上手く出来てないみたいだね」

もつとも、A R A sが参加者リストを手に入れたのも数年前と比較的、最近のことだ。

エゴシエーター能力によってリストの内容を改竄されている可能性もあるために、どこまで信用できるかは曖昧らしい。

「じゃあ、一つ質問してもいいですか？」

夕星の頭に浮いたのはちよつとした疑問だ。

「先生は、半年度から俺たちの学校に潜伏してたんですよね？ 名簿リストがあるって言

うなら、俺やヒマリがエゴシエーターでもかもしれないって当たりも付いてたんですし。なのにどうしてもっと踏み込んだ調査をしなかったんでしょか？」

ちよつと基地内を回っただけでも、A R A sの保有する技術水準が極めて高いことは理解できた。やろうと思えばもっと様々な調査ができたはずである。

「良い質問だね。けど、答えは単純。リスクヘッジをした結果さ」

未那月は腕を組ながらに応える。

A R A sからすれば、危険な思想を持つエゴシエーターは等しく脅威だ。フェイズIIといえど、下手に能力があると自覚させ、敵対した場合の対処は極めて困難となる。

「さっきも言ったけど、今のA R A sはごっそり人材が抜けたから戦力も極端に低下してるんだ。それに相手が危険なエゴシエーターなら、願うだけで私たちという存在自体をこの世界から抹消することも容易だろう」

だから、長期に渡り遠巻きに観察する必要があったのだ。

「ん……だけど、おかしくないですか？ リスクヘッジって言うわりに、先生は俺にだけ組織の秘密をベラベラ喋ってる。自分で言うのもアレですけど、俺は中学の頃、かなり荒れてた不良なんですよ。敵対する可能性を考慮するっていうのならバカ真面目なヒバチじゃなくて、元ヤンの俺の方じゃ？」

フィクションの中みたく、全てのヤンキー少年が捨て犬を拾うような善人とは限らない。夕星が反社会的、或いは破壊的な思想を秘めていたとしても何らおかしくはないのだ。

だと言うのに、彼女は絵に描いたような優等生である陽真里をより危険視しているような気がしてならなかった。

「私が神室さんに信頼を置いているのは、君が〈エクステンド〉を創り出したエゴシエーターだからだよ。君の願いから生まれたマシンが善良な存在である限りは、君の根っこが善良なままだっていう何よりの証明だからね」

「なら、ヒバチにだって信頼しても問題はないでしょう。アイツは俺以上の善人なんですし、そもそも俺が更生できたのだって、アイツのお節介があったからで」

本音を言ってしまうなら、彼女のことを疑われるのは不愉快であった。

夕星の態度は少し刺々しいものへと変わってしまう。

「ヒバチは俺の恩人なんです。断言したっていい、アイツがフェイズIIIのエゴシエーターに覚醒したとしても、その力を悪用するわけがないって」

「なるほど。……だったら、私も自分の本音を表明しておこうかな」

未那月が再度、両腕を組み直した。

一才のおふざけを抜きにして、彼女もその言葉をハッキリと口にする。

「私はね、藤森陽真里こそが、この世界に『怪獣』を生み出したエゴシエーターであると疑っているんだ」

夕星は神妙な面立ちでドアチャイムの前に立っていた。

「はは……ヒバチんちに来るのも何ぶりだろうな」

凡的な住宅街に聳えるマンションの二〇〇号室には「藤森」と表札が掛けられている。

確か、最後に遊びに来たのは確か小六の夏休みだった。最終日に宿題が終わらないと彼女に泣きついて、説教をされながらに課題ノートを片付けたのだ。

なんだが、懐かしさと情けなさが混ざり合って、苦笑がこみあげてくる。

「はあ……ここから俺はどうすればいいのやら」

現在。藤森陽真里には「無自覚ながら、『怪獣』という存在を生み出し続ける危険なエゴシーターである」という疑惑がかけられている。そこには当然根拠があり、未那月は次のように語るのだ。

「良いかい、神室くん。完全なエゴシーターとして覚醒するタイミングには個人差がある。けどね、フェイズIIのエゴシーターであれば、とある条件を満たすことで覚醒時期を故意に早めることが出来るんだ」

「その条件は、他の覚醒したエゴシーターと接触すること、或いは自らの願いによって誕生した産物と接触を果たすこと。この二条件のうち、どちらか片方を満たせば、内包された因子が活性化し、フェイズIIIのエゴシーターに覚醒する可能性が高まる仕組みさ」

夕星が「エクステンド」に乗り込むことで、自らの特異性を自覚していったように。陽真里も自らの願いから生まれた産物と接触を果たせば、フェイズIIIの完全なエゴシーターに覚醒する可能性が高くなる。

その前提を踏まえた上で、あの武道使い怪獣のことを思い出して貰いたい。「フジモリヒマリ」と啼き続けたあの個体が陽真里に接触しようとしていたことは事実であり、「なかなか力を自覚しない産みの親に嫌気がさして、遂に怪獣の方から陽真里に覚醒のキッカケを作ろうとしていたんじゃないか？」というのが未那月側の推論であった。

夕星はそこまでの説明を思い返し、頭を振るう。自分にはどうやっても「陽真里Ⅱ怪獣を生み出し続けるエゴシーター」という図式を組み上げることができないのだ。

「ヒバチが怪獣の生みの親だって？ アイツに限ってそんなこと、あるわけねえだろ」

陽真里は良くも悪くも生真面目なお人好しなのだ。

その面倒な性格のせいでトラブルに巻き込まれることも多く、色恋沙汰の仲裁や、委員会役員として不良たちの遡行を咎めて回っているのだから一方的な逆恨みをされたことも一度や二度じゃない。

そのことを知る夕星にしてみれば、怪獣を生み出したエゴシエーターが彼女を逆恨みして、危害を加えようとしている可能性の方がまだ納得できる。

「あっもう、考えても仕方ねえ！」

最近はどうにも悩まされてばかりな気がする。今にもオーバーヒートして白煙を上げそうな頭を抱えながらにチャイムを押し込んでやった。

「ビビったら負け、ビビったら負けなんだ！」

己がスタンスを繰り返す夕星であったが、そのガチガチな形相は間違っても幼馴染を尋ねるものではない。靴底は足元から数センチ浮いて、文字通り浮き足立っているのであった。

「はい、すぐ出ます」

チャイムの軽やかな音色から数秒の間を置いて、声が返ってくる。

パタパタと忙しない足音がして、彼女がドアを押し開けた。

「どちら様でしょう……って、夕星……？」

陽真里の様子におかしな点は見られない。怪獣を呼び出す素振りもなければ、瞳が歯車状に変わるわけでもなかった。彼女から受ける印象も「日常らしさ」そのものだ。

「ツツ……！」

けれども、夕星はその格好に目を奪われる。ダボっとした上着に反し、丈の短なショートパンツからは彼女の健康的な太腿が覗いているのだから。

髪もピョンと跳ねて、普段から制服をカッチリ着こなす彼女とは真逆のラフな印象を受けてしまった。

そんな無防備な姿に対し、ウブな夕星が耐性を持っている訳もなく、

「なっ、なんて格好してんだよ！ お前はッ！！」

顔を真っ赤に、意味も分からぬ抗議をしてしまう。

「別に普通の部屋着だけ。貴方こそ、なんで日曜日に学校の制服なんて着てるのよ？」

彼女が疑問に首を傾げれば、オーバーサイズのシャツがずれて、色白の肌と鎖骨が露わになった。

「何よ、さつきから視線を右へ左へとズラしてさ。なんかやましいことでもあるわけ？」

「お前の格好がエッチなのがいけねえんだろが！」なんて反論ができるわけもなく、夕星は誤魔化すように平静を保つ。

「い、いやぁー。ヒバチのクセに随分とだらしない格好してるなあと思ってさ」

「それなら、そっちこそ。普段はネクタイも緩めっぱなしのクセに。お洒落なネクタイピンまでして。……というか、貴方。この前、怪獣が出たとき、どこで何やってたの？」

「へ……？」

「私、貴方のことが心配で何度も連絡しようとしたんだけど。全部無視してくれるなんて、なかなかいい度胸してるじゃないの」

「い、いや……そ、それには心底深い理由がございまして！」

陽真里の頬はブクーとむくれていく。

「中学の頃から言ってるわよね！ 心配させるようなことはしないでっ！」

猫目を吊り上げながらに彼女が一喝。

「は、はいッ！」

「どうせ貴方のことだからへエクステンド」の奮闘を見るのに夢中だったんでしようけど。この際だから私も色々言いたい事が溜まってるの！ ちょっと私の部屋に上がっていきなさい！」

「りよ、了解致しましたッ！ ……って、お前、今なんて言った？」

聞き間違えじゃなければ、「部屋に上がれ」と言われた筈だ。

正直に言って夕星は、陽真里のことを調べるにあたり、どうやって彼女の部屋に入れて貰うかをずっと悩んでいたのだ。彼女の部屋にはきつと「陽真里Ⅱ怪獣を生み出し続けるエゴシエーター」という図式を否定できるような材料が見つかるのだろうが、年頃の女子高生の自室に容易く入れないと思っていた。

だから「勉強を教えてほしくて」や「昔、お前んちで無くしたゲームソフトを探したくて」等々、それっぽい理由を考えてきたのだが、彼女はあまりにもすんなりと、ドアを開けてくれる。

「なにボサっとしてるの？ 早く上がりなさい」

部屋着姿の格好といい、男子を簡単に部屋に上げてしまう言動といい、陽真里はいささか無防備がすぎる気がした。

彼女は、自分を異性として見られていないのか？

それならそれで、堪えるものがあるのも事実だが、彼女の疑いが晴れたあとで「その無防備さを咎めてやろう」と心に決めるのだった。